

文部科学省委託事業

地域社会に根ざした高等学校の学校間連携・協働ネットワーク構築事業
(COREハイスクール・ネットワーク構想)

石見オロチCOREハイスクール・ネットワーク構想
～夢と絆を育むふるさと創生人の育成～

令和5年度 成果報告書(事業最終年度)

島根県立益田高等学校



島根県立津和野高等学校



～いろいろな教科を

わかち合う環境から

みんなで探究～



島根県立江津高等学校



島根県立吉賀高等学校

令和6年3月
島根県教育委員会

本報告書は、文部科学省委託事業「地域社会に根ざした高等学校の学校間連携・協働ネットワーク構築事業（COREハイスクール・ネットワーク構想）」における島根県の成果をまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等については、文部科学省の承認手続きが必要です。

成果報告書に寄せて

令和3年4月、コロナ禍の中、地域社会に根ざした高等学校の学校間連携・協働ネットワーク構築事業（COREハイスクール・ネットワーク構想）の採択という文部科学省からの朗報が届き開始したこの事業も、早くも3年目が終了し、事業終了となりました。島根県ではこの事業を『石見オロチCOREハイスクール・ネットワーク構想～夢と絆を育むふるさと創生人の育成～』と題し、関係機関と協働して取り組んできました。本事業の構成校である益田高等学校、津和野高等学校、吉賀高等学校、江津高等学校及び各コンソーシアムの皆様、事業評価委員の諸先生方や島根県教育センターをはじめ、ご協力、ご指導をいただいた関係の皆様には厚くお礼申し上げます。

事業3年目の令和5年度は、「モデルの確立」の期間と位置づけ、遠隔授業の授業デザインや学習評価方法の研究、学校間の合同探究学習を行うなど新たな学びへの挑戦となりました。特に遠隔授業では、授業デザイン、学習状況評価、授業者とサポート教員との学校間連携など遠隔授業の改善に向けた1年となりました。この事業は実証検証という挑戦の場ではありますが、同時に構成校の生徒を対象とした実際の授業を行うものです。配信校で授業を担当された先生方や受信校で授業をサポートしていただいた先生方には、多くの準備とご苦勞があったものと思います。この場を借りて感謝申し上げます。

この3年間の実証検証から、遠隔授業により生徒たちの科目選択や進路選択の幅を広げることができることが確認できた一方で、学校、授業者の負担等の存在も明らかになりました。

事業終了後においても本事業の成果を生かすことで、生徒一人ひとりの夢の実現など新たな学びの可能性を切り拓いていくことができるものと考えております。

この報告書は、事業の取組がどのような結果をもたらしたのか、どのような困難に直面したのか、そして何を学び、何を改善すべきかを明らかにするとともに、今後の取組の指針を示すものです。この報告書が将来の教育改革に対する参考資料となり、より良い教育環境を創り出すための助けになることを願っています。

令和6年3月

島根県教育庁教育指導課長 小林 努

石見オロチCOREハイスクール・ネットワーク構想

【現状】

- ①人口が島根県東部に偏在し、西部は人口も少ない。また西部は中山間地域で、大学など高等教育機関も少ないため、高大連携が進みにくく、県内大学への進学率が低い要因の一つとなっている。
- ②学校内では教育資源も限られ、中山間地域の学校では、生徒も幼少期から同級生が変わらず視点や視野も硬直化しがちである。
- ③西部にある高校の多くが中小規模校。教員数が少なく、多様な選択科目の開講が単独では難しく、習熟度展開もしにくい。地歴科、理科教員は、専門外の科目を受けもつなど負担も大きい。
- ④西部出身の教員が少ない。教員の異動サイクルが早く、非常勤講師となる人材の確保も厳しく安定した学校経営が難しい。一方で勤務2〜3校目の若手、中堅教員層が多いことも特徴である。
- ⑤各高校が設置した高校魅力化コンソーシアムは、それぞれに良さや特徴、またそれを生み出す手法等を持っているが、それを相互に共有する場や機会は多くない。各コンソーシアム間の情報交換の場が必要。

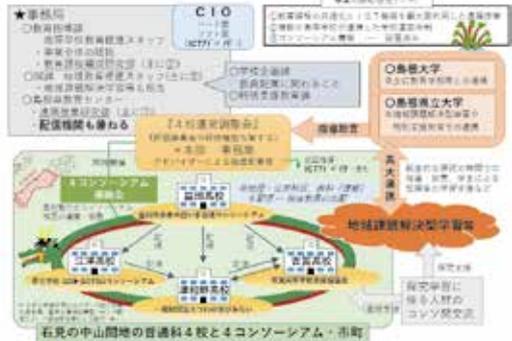
目的

～夢と絆を育むふるさと創生人の育成～

広い視野から自分の住む地域を見つめ、ふるさとに魅力を感じ、地域をよりよくしていこうとする生徒の育成を目指すとともに、自らの夢を再確認し挑戦していこうとする気持ち、オンラインによる4校間の交流や大学との連携、地域資源の最大活用を通して絆を再確認し深め広げていくことを目指す。

1. 遠隔事業に関する取組の概要

単独配信型（配信校側は生徒なし）を主とする。その中で、対面授業を主としながらも授業の一部を共同授業（配信校・受信校側双方に生徒あり）で行う授業方式についても検討する。また、将来的には地元の高校で職業系の専門科目の一部を学べるようにすることも視野に入れる。



2. 地元自治体等の関係機関と連携・協働する体制の構築に関する取組の概要

総合的な探究の時間（地域課題解決型学習）を4校合同で一部実施する。これに、県教委で構築を構想している「オンライン探究支援システム」（仮称）の支援機能を4校で先行的に活用していく。各校のコンソーシアム相互の連携・協働を図るための「4校コンソーシアム連絡会」を組織化し、4校間の交流や大学との連携、地域資源の最大活用を通してふるさと創生人の育成を図る。

3. ネットワークを構成する学校

- ・島根県立益田高等学校（普通科・理数科）
- ・島根県立江津高等学校（普通科）
- ・島根県立津和野高等学校（普通科）
- ・島根県立吉賀高等学校（普通科）
- ・島根県教育センター【試行配信、遠隔授業研究】

石見オロチCOREハイスクール・ネットワーク構想



育成を目指す資質・能力

「広い視野から自分の住んでいる地域を見つめ、ふるさとに魅力を感じ、地域をよりよくしていこうとする生徒の育成」

- (1) 高大連携学力向上…大学の教官や学生の知見を得る
- (2) 地域愛の醸成…地域課題解決型学習を各校魅力化コンソーシアムと連携を図りながら充実させる
- (3) ICTリテラシー向上…ICT活用の機会を増やす
- (4) 非認知領域（主体性、協働性、社会性、探究性）の育成…地域課題解決型学習等で自ら企画・行動する機会を増やす
- (5) 協働性の向上…自校のみならず他校を含めた活動の場を増やす
- (6) 質の高い学びの保障による学力の向上…免許外教員の指導や未開講教科・科目を減らす

主なアウトプット（活動目標）

- **研修の充実**
遠隔教育・探究学習を軸としたカリキュラム・マネジメントを担う主幹教諭、授業担当者、探究学習推進担当者、魅力化コーディネーターなど、それぞれに応じた研修を実施
- **探究学習の手引き作成**
探究学習をリードする教職員や魅力化コーディネーターの知見や事例を集約した、「総合的な探究の時間ガイドブック」を作成
- **支援人材活用のためのシステム構築**
探究学習の質の向上を目指し、各学校やコンソーシアムが持つ支援人材を相互に活用しあう仕組みをつくるため、支援人材が交流できる場を設定

主なアウトカム（成果目標）

- 配信科目の遠隔授業に対する授業アンケートから、各観点別評価の項目に係る質問（4〜1）に対し肯定的な回答をした生徒の割合（配信科目受講生徒平均）
…… 令和5年度 3.2以上/4点満点
- 配信科目の遠隔授業に対する授業アンケートから、授業満足度（4〜1）に対し肯定的な回答をした生徒の割合（配信科目受講生徒平均）
…… 令和5年度 3.2以上/4点満点
- 免許外教科担任制度の活用件数
…… 令和5年度 1人
- 高校魅力化アンケート「将来、自分の住んでいる地域のために役に立ちたい」という気持ちがある。」に肯定的な回答をした生徒の割合（4校平均）
…… 令和5年度 75%
- 高校魅力化アンケート「地域社会の魅力や課題について、自主的にテーマを設定し、フィールドワーク等を行いながら調べ考える学習に対して、熱心に取り組んでいる。」に肯定的な回答をした生徒の割合（4校平均）
…… 令和5年度 65%

委託期間終了後の見通し

中山間地域校における免許外教科指導の是正に向け、島根県教育センターと連携を図り、継続的な支援環境を整備する。その上で遠隔学習に関するセンター的機能の在り方について検討する。「しまね探究フェスタ」等の探究学習の成果発表会等での交流を通して、各コンソーシアムが持つ探究学習に係る人材を相互に活用できる仕組みを構築していく。

目次

1.	事業概要	1
1.1.	本事業に取り組む課題と目的	1
1.1.1.	県立高校魅力化ビジョン	1
1.1.2.	遠隔授業に取り組む経緯	3
1.2.	本事業を通して明らかにしたい事項（調査研究テーマ）	5
1.2.1.	遠隔授業	5
1.2.2.	コンソーシアム	5
1.3.	ロードマップ	6
1.3.1.	遠隔授業	6
1.3.2.	コンソーシアム	6
2.	遠隔授業の実施やその運営体制に関する取組	7
2.1.	調査計画	7
2.2.	実施体制	8
2.3.	取組概要	8
2.3.1.	遠隔授業実施表	9
2.4.	取組内容	9
2.5.	考察	20
2.5.1.	目標設定シートに対応した成果と課題	22
3.	コンソーシアム構築による教育の高度化・多様化に関する取組	25
3.1.	調査計画	25
3.2.	実施体制	26
3.3.	取組概要	27
3.3.1.	地域と協働した取組実績	27
3.4.	取組内容	29
3.5.	考察	37
4.	まとめ	38
4.1.	遠隔授業	38
4.2.	コンソーシアム	39
5.	次年度に向けた計画概要	40
5.1.	遠隔授業	40
5.2.	コンソーシアム	40
6.	資料集	41

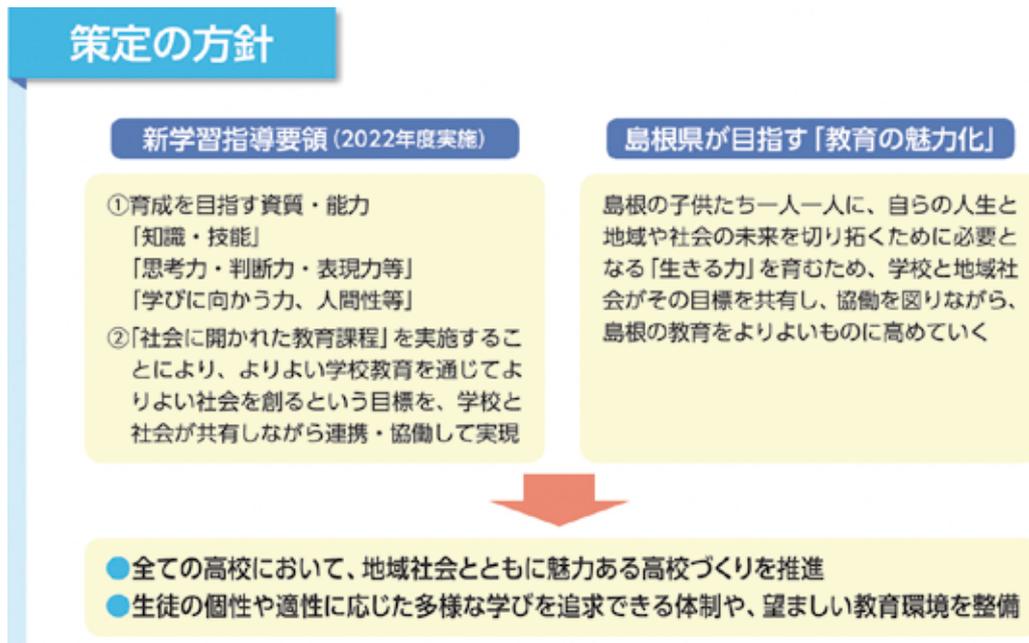
1. 事業概要

1.1. 本事業に取り組む課題と目的

1.1.1. 県立高校魅力化ビジョン

本県教育委員会では平成31年2月に「県立高校魅力化ビジョン」を策定している。

本県の目指す魅力ある高校づくりに向けて「島根の子供たち一人一人に、自らの人生と地域や社会の未来を切り拓くために必要となる「生きる力」を育むため、学校と地域社会がその目標を共有し、協働を図りながら、島根の教育をよりよいものに高めていく」と定義しており、その実現に向けて「全ての高校において、地域社会とともに魅力ある高校づくりの推進」や「生徒の個性や適性に応じた多様な学びを追求できる体制や、望ましい教育環境の整備」を行うこととしている。



「生きる力」を育む 魅力ある高校と 地域づくりの推進

地域に根ざした小さな高校が果たした大きな教育効果を全県に広げ、全国に誇れる島根らしい魅力ある高校づくりを進める

- 1 地域協働スクールの実現
- 2 地域資源を活用した特色ある教育課程の構築
- 3 多様な学びの保障
- 4 「学びの成果」の捉え方・示し方の開発と、学校評価の改善
- 5 「しまね留学」の推進

生徒自らが選び、学び、 夢を叶える 高校づくりの推進

主体的な学習を促し、個性、適性、志向性に応じた多様な学びを生徒一人一人が追求できる、魅力ある高校づくりを進める

- 1 「求める生徒像」の確立と入学者選抜方法の改善
- 2 特色ある学科・コースの設置による、主体的な学びの推進
- 3 生徒の主体性が発揮される高校づくりの推進
- 4 学びのセーフティネットの構築
- 5 インクルーシブ教育システムの推進
- 6 ICTを活用した授業改善の推進

将来を見通した 教育環境の整備

将来を見通した各高校・指導の在り方の実現に向けた環境整備を推進する

- 1 地域別の高校の在り方
- 2 教員の働き方改革、教員の確保と育成

県立高校魅力化ビジョンには、実現に向けた様々な取組が記載されているが、ここではCOREハイスクール・ネットワーク構想に関連する部分を取り上げる。

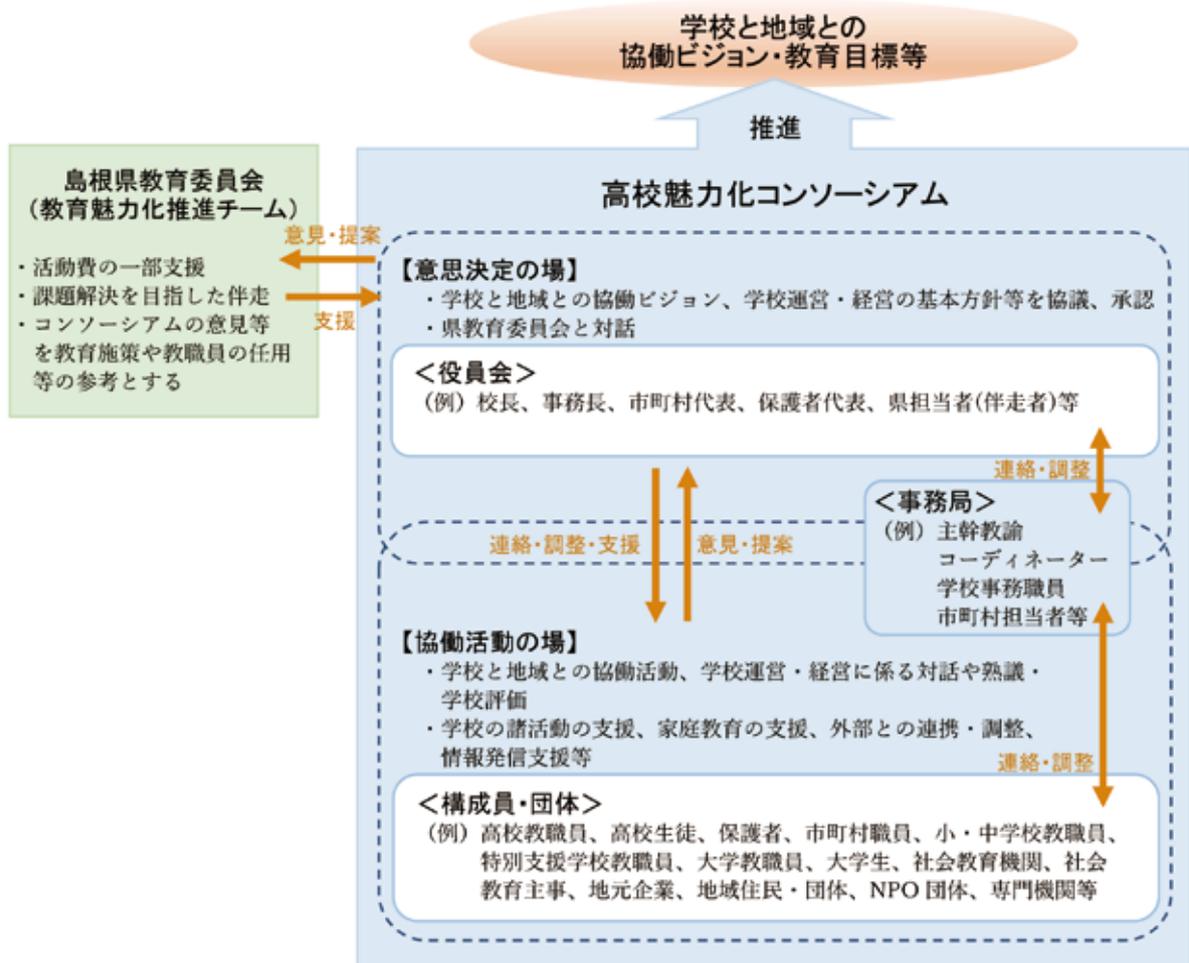
地域協働スクールの実現（高校魅力化コンソーシアムの構築）

本県の高校魅力化コンソーシアムは各学校によって構成員は異なるが、その多くが、教職員、生徒・保護者、市町村、小・中学校、大学、社会教育機関、地元企業、地域住民、関係団体等の多様な主体が参画しており、県内の全ての県立高校において令和3年度中に構築されている。

項目	2018 H30	2019 H31	2020 (H32)	2021 (H33)	2022 (H34)	2023 (H35)
高校魅力化コンソーシアムの構築	高校魅力化推進協議会等	構築・展開			全ての高校で構築	推進

※高校における新学習指導要領が実施される2022年までに、全ての高校において構築

●地域協働スクールのイメージ図



※ 上図は1高校1コンソーシアムの例であり、市部においては複数の高校で1コンソーシアムの場合も想定される。

地域資源を活用した特色ある教育課程の構築

新学習指導要領では「どのように学ぶか」が重視されており、その具体的な在り方として「主体的・対話的で深い学び」が求められている。そのためには、学んでいることと社会のつながりを意識しながら教科横断的に学びを深め、さらに探究的な学びを引き出すことのできる地域資源を活用した教育課程を構築することが有効である。

島根県には各地域に豊かな自然、伝統・歴史、文化、産業があり、生徒を温かく支え育てようとする地域社会が今なお残っている。県内の小・中学校ではこうした地域資源を活用した教材が作成され、ふるさと教育が進められてきた。これまでの蓄積を生かし、高校においても、各地域の小・中学校や社会教育機関等と連携し、小学校から高校まで連続性のある指導方法や教材を研究し、さらに地域での実体験や、多様な人々との交流と対話的な学びを通して、学校で学ぶことと地域や社会でよりよく生きることをつなぎ、学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力を育む。

1.1.2. 遠隔授業に取り組む経緯

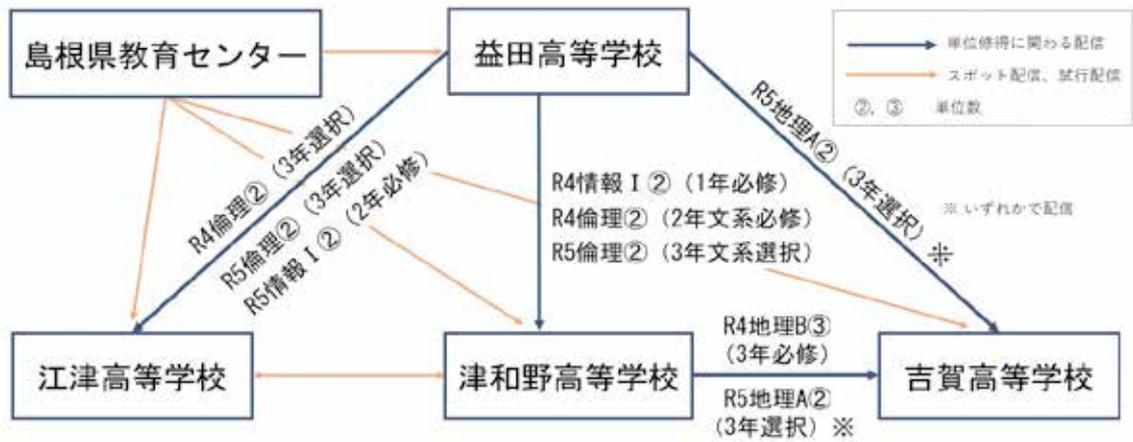
現在、本県においては島根県東部に人口が偏在し、西部の人口は少ない（人口比5：2）。県条例では県東部の松江市、出雲市以外は中山間地域とされており、県西部全ての地域が中山間地域として指定されている。また、大学など高等教育機関も少ないこと（県西部は島根県立大学浜田キャンパスのみ）から、高大連携が進みにくく、県内大学への進学率が低い要因となっている。

本県の県立高校の多くは中小規模校のため教員数が少なく、一部の学校では教育課程編制において多様な選択科目の開講が困難な状況にある。地理歴史科・公民科、理科教員は、採用された専門科目以外の科目を受け持つことが多く、負担も大きい。また、本県において

教科「情報」の採用教員は4名（令和5年4月現在）しかいないため、各校は他教科採用の情報免許保有者で対応しているが、情報免許保有者が配置されていない学校については、免許外の教員に臨時免許状を発行したり、外部の専門人材に特別免許状を発行して指導したりしているのが現状であるが、指導の継続性や授業の専門性向上に対しては課題も多い。

以上のことから、本事業で上記課題解決について筋道をつくることを目的に、本事業へ取り組むこととした。一定の成果が得られれば、教員配置の最適化と高校間の共有を進める。例えば、教科「情報」の配信拠点校を設定し、専門性の高い教員による授業配信を行うことなどが考えられる。また、今回の取組は単独配信型（配信校側は生徒なし）を主とするが、対面授業を主としながらも授業の一部を共同授業（配信校・受信校側双方に生徒あり）で行う授業方式についても検討する。また、将来的には地元の高校で職業系の専門科目の一部を学べるようにすることも視野に入れる。





[遠隔授業の配信校・受信校 関係図] *スポット授業：単位認定をせず年間一定回数配信する授業

○授業スタイル

- A：習熟度対応型 … (スポット) 英語、数学、理科等
- B：未開講科目、免許外、専門外型 … (単位修得) 地理歴史・公民、情報
- C：指導重点型 … (試行) 遠隔による合同授業の実施
- D：探究学習型 … 総合的な探究の時間などを複数校間で同時に実施
- E：センター配信型 … 各校からの授業配信を行う上での遠隔授業研究、試行配信

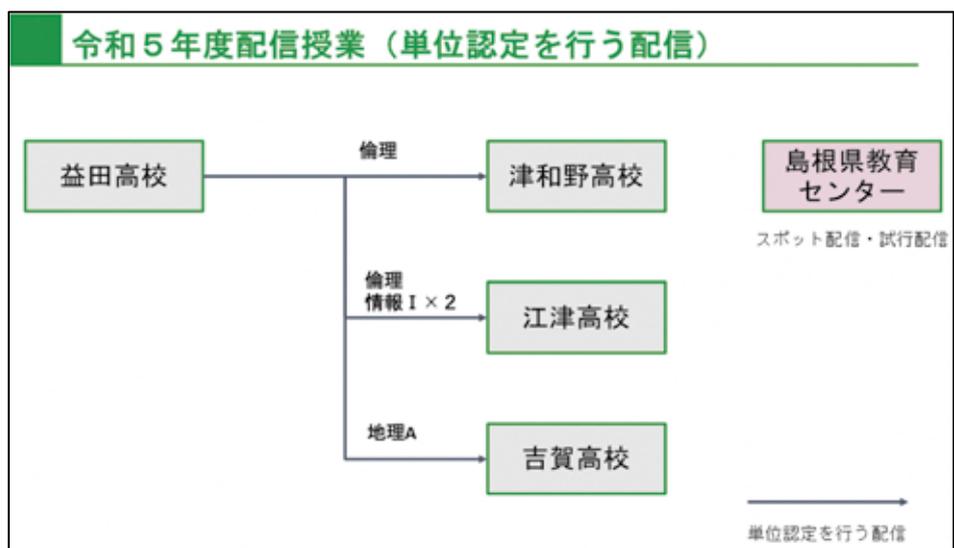
○遠隔授業方式

- a：単独授業型 (スタジオ→教室) … 主にこの方式で実施
- b：合同授業型 (教室→教室、学校外) … 総合的な探究の時間、スポット授業

○配信方法

- α：同時双方向型 (受信側：担当教員、担当教員外) … 原則この方法で実施
- β：オンデマンド型 … スポット授業でオンデマンド配信を試行

COREハイスクール・ネットワーク構想 構想調書より



(令和5年度授業配信計画)

1.2. 本事業を通して明らかにしたい事項（調査研究テーマ）

1.2.1. 遠隔授業

① ICT機器を利用した遠隔授業の実現

本事業に取り組むにあたり、一昨年度（実証検証1年目）は遠隔授業についての試行配信を複数回行い、ICT機材の組み合わせから使用方法、そして遠隔授業における授業デザインについて検証した。その結果、配信側・受信側でChromebookを複数使用したWeb会議システム環境、教員と生徒間の教材やワークシート等についてはクラウド環境を活用して行うことで年間の授業を進めることができるのではないかという仮説を得ることができた。

昨年度（実証検証2年目）は、これらの遠隔授業環境とクラウドを活用した授業デザインにより年間の授業が成立し得るかを検証し、授業者、サポート教員がそれぞれ試行錯誤しながら遠隔授業での授業実施、単位認定まで行うことができた。

本年度（実証検証3年目）は、2年目の事業成果を基に遠隔授業の質的向上を行い、モデル化し、多くの教員、学校が遠隔授業に取り組むことができるようになることを目指す。

1.2.2. コンソーシアム

① コンソーシアムの充実

② オンラインを活用した学校間連携による探究学習の深化

③ 探究学習やキャリア教育におけるオンラインによる地域を越えた外部人材活用の可能性

本県では、本事業に取り組む以前から対象4校には「高校魅力化コンソーシアム」が構築済みであり、また令和3年度末には全ての県立高校でコンソーシアム構築が完了している。そこで本実証検証においては、各コンソーシアムが行う協働活動の充実や協働体制の推進、オンラインなどのツールを活用したコンソーシアム・学校間の連携について検証を行うとともに、オンライン探究支援システム等の構築による外部人材の活用についても、探究学習、キャリア教育の両面で検証を行うこととしている。

1.3. ロードマップ

1.3.1. 遠隔授業

年度	内容	備考
令和3年度 (1年目)	試行配信 ・配信・受信環境構築、授業デザイン構築	配信：島根県教育センター、 益田高校 受信：津和野高校、吉賀高校、 江津高校
令和4年度 (2年目)	本格配信 ・遠隔授業実施上の課題等の確認 (生徒の理解度、教員負担等)	配信：益田高校、 津和野高校 受信：津和野高校、吉賀高校、 江津高校
令和5年度 (3年目)	本格配信 ・遠隔授業の持続可能性を確認 (授業準備、対面移動、サポート教員等の負担)	配信：益田高校 受信：津和野高校、吉賀高校、 江津高校
令和6年度 以降	・中山間地域校における免許外教科指導の是正に向け、島根県教育センターと連携し、継続的な支援環境を整備する。その上で遠隔学習に関するセンター的機能の在り方について検討する。	

1.3.2. コンソーシアム

年度	内容	備考
令和3年度 (1年目)	オンライン探究支援システム*の試行、構築	津和野高校、吉賀高校
令和4年度 (2年目)	オンライン探究支援システムの活用	津和野高校、吉賀高校 益田高校、江津高校
	総合的な探究の時間（地域課題解決型学習）を 2校合同で一部実施	津和野高校、吉賀高校
令和5年度 (3年目)	4校連携コンソーシアムの実施	津和野、吉賀、益田、江津の 4コンソーシアム
	オンライン探究支援システムの活用 (令和5年度の実施は断念)	全県展開
令和6年度 以降	総合的な探究の時間（地域課題解決型学習）を 4校合同で一部実施	津和野高校、吉賀高校 益田高校、江津高校
	4校連携コンソーシアムの実施	津和野、吉賀、益田、江津の 4コンソーシアム
令和6年度 以降	・高校魅力化コンソーシアム推進に向けた伴走や 研修の継続 ・コンソーシアムの自走化に向けた取組 ・コーディネーターへの伴走や研修の継続 ・「総合的な探究の時間」における県内全域の学校 同士の交流や人材の活用等の検討継続	

* オンライン探究支援システム…探究学習やキャリア教育の充実に向けた、オンラインによる外部人材の活用支援システム

2. 遠隔授業の実施やその運営体制に関する取組

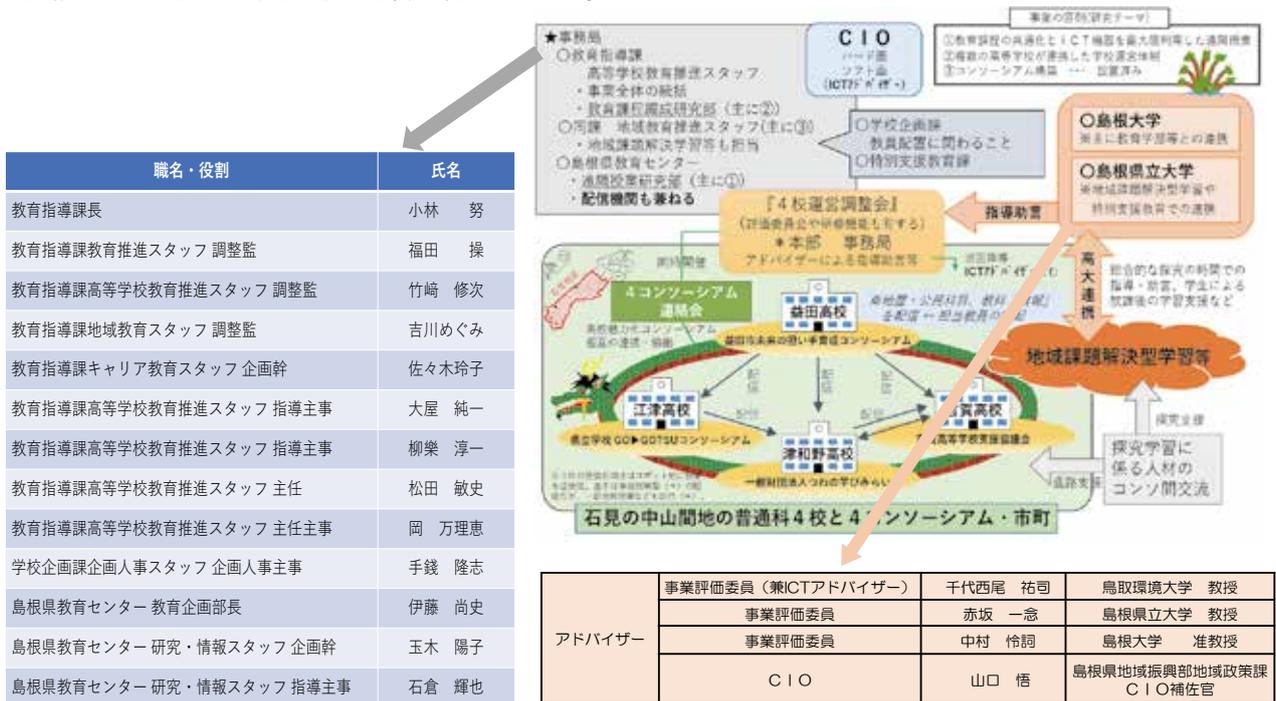
2.1. 調査計画

月	実施内容（●全体■各校）
令和5年 4月	●業務委託締結 ●第1回4校運営調整会 ■配信オリエンテーション（授業担当者・受信先担当者） ■遠隔授業配信
5月	■遠隔授業配信
6月	■遠隔授業配信
7月	■遠隔授業配信 ●先進地視察（北海道） ●授業アンケート
8月	●研修会 ■遠隔授業配信
9月	■遠隔授業配信 ●配信方法見直し検討会 ●第1回公開授業
10月	■遠隔授業配信
11月	●中間事業評価 ■遠隔授業配信 ●宮崎県視察対応 ●実証地域連絡会議
12月	●学校評価アンケート ●授業アンケート ●第2回4校運営調整会 ■遠隔授業配信 ●第2回公開授業
令和6年 1月	■遠隔授業配信 ■スポット配信（商業科）
2月	●年度末事業評価 ■遠隔授業配信
3月	●第3回4校運営調整会 ■遠隔授業配信 ●授業アンケート

2.2. 実施体制

遠隔授業に取り組む体制として、CORE関係校4校に事務局を加えた4校運営調整会を中心に組織を作っている。今年度の主な構成メンバーは次図のとおりである。4校運営調整会はCORE事業全般に関する様々な意思決定を行う機関として設置しており、それとは別に4コンソーシアムでの調整を行う4コンソーシアム連絡会、日頃の事業の調整を行う主幹教諭会を設けている。

島根県の県立高校における主幹教諭の役割のひとつに、各校のグランドデザインの実現に向けた教育活動の推進があり、学校のマネジメント機能の強化、ならびに他の教員への指導助言による学校全体の教育活性化などが期待されている。そのため、本事業においては、構成校の主幹教諭が事務局や学校との連絡をとりまとめているのも、本県の特徴である。細かい調整などが必要な場合は、主幹教諭会を適宜開催することで各学校間の連携に努めている。



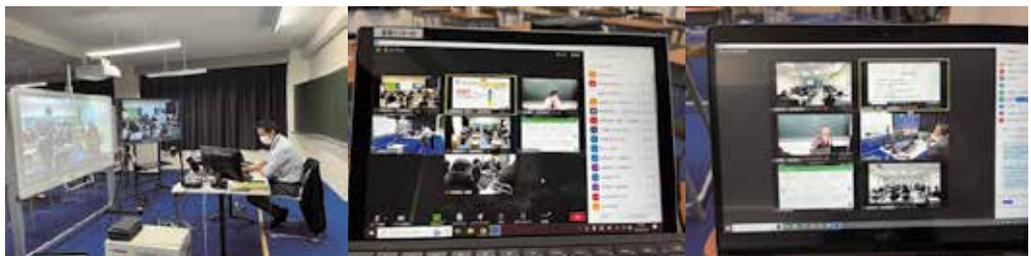
○本年度開催時期・回数（実績）

調整会・連絡会	開催月
4校運営調整会	4月、12月、3月
主幹教諭会	5月、庁内チャット、Classroomにより適宜情報交換

2.3. 取組概要

実証検証3年目については、2.1で示した実施計画に沿って取組を行った。遠隔授業については、昨年度と同様に5月中旬までは授業を対面で行い、教員と生徒の関係作りを行ったうえで5月中旬の中間試験の後に遠隔授業を開始した。

本年度は9月、12月に公開授業を行い、県内の教職員に加え、全国各地から多数の参加者があつた。



2.3.1. 遠隔授業実施表

配信拠点	受信校	教科名	科目	開設学年	配信校生徒の有無	遠隔授業実施理由	受信側の配置体制	遠隔授業実施回数/全授業回数
益田高校	吉賀高校	地理・歴史	地理A	3	無	専門性	教員	29/43
益田高校	津和野高校	公民	倫理	2	無	多様な教科・科目	教員	39/51
益田高校	江津高校	公民	倫理	3	無	多様な教科・科目	実習教員 (教員免許保有)	35/52
益田高校	江津高校	情報	情報 I	2	無	免許外・専門性	実習教員 (教員免許保有)	38/63
益田高校	江津高校	情報	情報 I	2	無	免許外・専門性	実習教員 (教員免許保有)	38/63
島根県教育センター	吉賀高校	商業	情報処理	1	無	専門性	教員	2/2 ※スポット配信

2.4. 取組内容

本年度実施した遠隔授業実施科目は以下のとおりである。

<単位認定を行う授業>

- ・科目：地理A 3単位 3年 31名 益田高校 → 吉賀高校
- ・科目：倫理 2単位 2年 21名 益田高校 → 津和野高校
- ・科目：倫理 2単位 3年 5名 益田高校 → 江津高校
- ・科目：情報 I 2単位 2年1組 29名 益田高校 → 江津高校
- ・科目：情報 I 2単位 2年2組 31名 益田高校 → 江津高校

<スポット配信>

- ・科目：情報処理（商業科） 1年 島根県教育センター → 吉賀高校

令和4年度の実証検証から、遠隔配信による「単位認定を行う授業」が実施可能であることは検証ができた。本年度は「質の向上」をテーマに検証を進めた。ちなみに、令和4年度は以下の1)～5)の項目について検証を行った。本年度も引き続きこの項目で検証を行った。

<検証項目>

- 1) 遠隔授業に必要なICT環境
- 2) 授業づくり・生徒の見取り・評価
- 3) 受信校で授業に立ち会う者の資質や役割
- 4) 遠隔授業を受けた生徒の評価や変容
- 5) 持続可能性のある遠隔授業の環境・支援体制について

1) 遠隔授業に必要なICT環境

遠隔授業では、受信校側はスライド等の資料を提示する教室前方プロジェクターと、教師が投影される教室前方大型モニタを中心に授業を受けている。なお、教師側には教室の後方からの映像を確認することができるように教室後方カメラ（iPad）を設置している。

- ・受信側教室前方プロジェクター：教師スライド資料、教師操作画面、実物投影機の投影
- ・受信側教室前方大型モニタ：教員（授業者）の投影
- ・配信側・受信側の Google Classroom とカメラ・マイクの接続設定

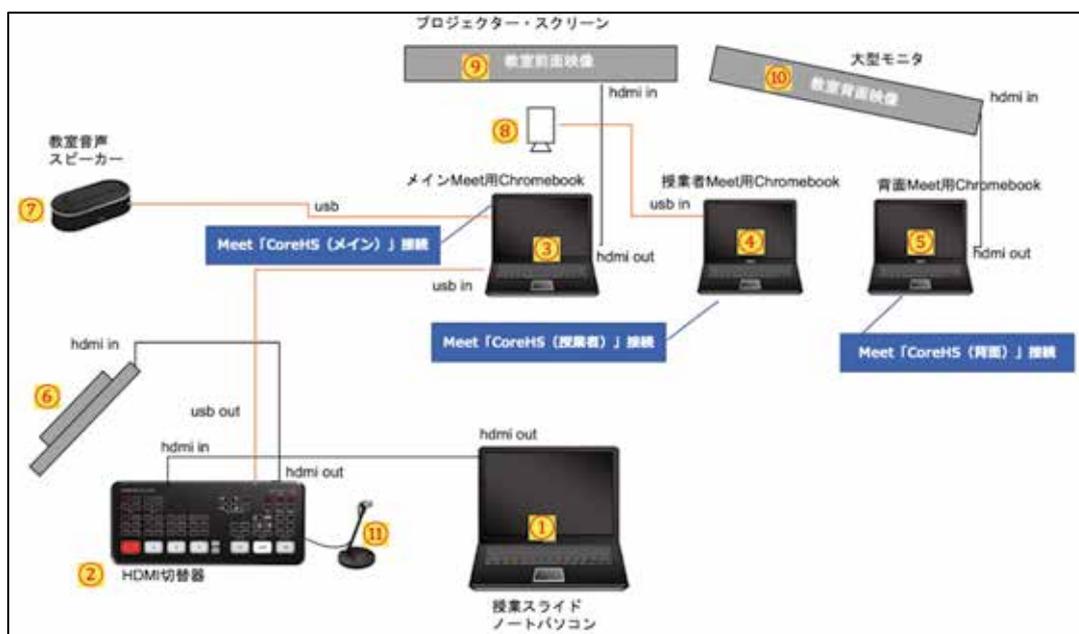
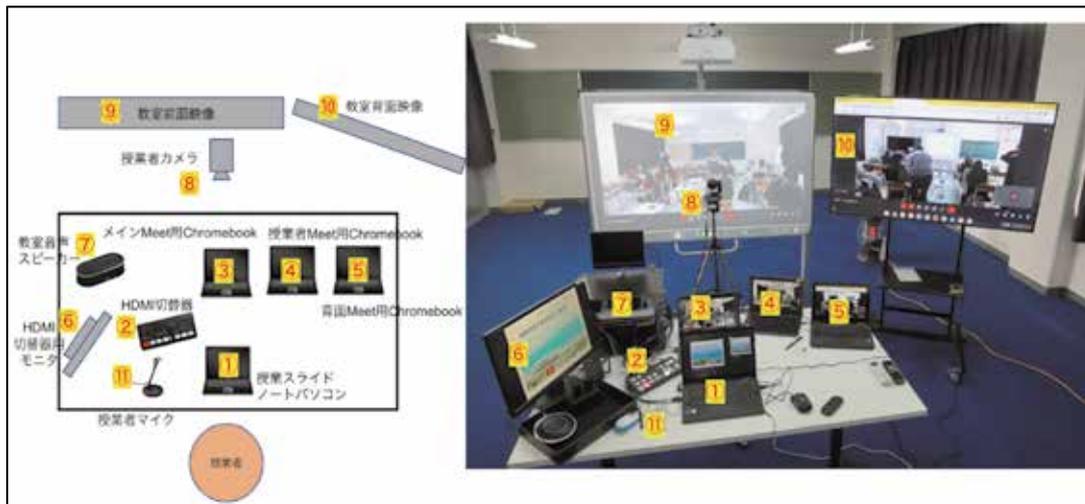


- ・配信側・受信側（※は受信側のみ）

機器種別	製品・サービス	台数
遠隔会議システム	Google Meet	
クラウド環境	Google Workspace for Education Microsoft365 スクールタクト	
遠隔システム用PC	Chromebook Dell 3110 Apple iPad Wi-Fi 256GB	3台 1台
カメラ	LOGICOOL PTZ PRO 2 SONY FDR-AX45A スイッチャー: Blackmagic Design ATEM MINI PRO	1台 1台 1台
マイク・スピーカー	ワイヤレスマイク: RODE WirelessGO II Single Wireless System、 lavalierGO 指向性マイク: LINE6 XD-V35 ※ 無指向性マイク: YAMAHA YVC-1000 スピーカー: YAMAHA Stagepas 400BT ※	1台 1台 1台 1台
大型提示装置	プロジェクター: EPSON EB-725WI ボードスタンド: IWS-10EF3 大型モニタ: IO-DATA LCD-M4K652XDB	1式 1台 1台
遠隔授業で使用するソフトウェア	Google Classroom、Google Documents、Google Spreadsheets、 Google Jamboard、Google Slides Google Colaboratory、schoolTakt 他	
生徒用端末	ASUS Chromebook Detachable CZ1 (CZ1000) 生徒1人1台 (BYADによる生徒端末: 1・2学年) Chromebook Dell 3110 (3年対象の授業においては各校人数分県教委で購入配置)	生徒個人持ち (1・2年生) 3年遠隔授業受 講者人数分調達

※印は受信校のみ配備

配信拠点（島根県立益田高等学校）構成



受信校構成



2) 授業づくり・生徒の見取り・評価

<倫理>

倫理の授業では昨年度に引き続き、主体的・対話的で深い学びを実現するため、知識構成型ジグソー法を取り入れ、Google Classroom、Spreadsheet、Jamboard を用い実施した。対話による学習場面において、一人ひとりの考えや、対話によって生まれた新たな考えをクラウド環境へ入力することで、生徒の活動を言語化し視覚化することができた。視覚化することで遠隔地からでも生徒の学習状況を見取ること、それを利用して学習状況評価につなげることができた。

■遠隔授業で行った学習活動（益田高校→津和野高校 3年生 倫理 2単位）

クラウド環境（Google Classroom、Google Spreadsheets、Google Jamboard）の活用

○Google Classroom（課題配信：エキスパート活動）



○Google Spreadsheets（共同編集：エキスパート活動）

A1	番号	氏名	C	D	E	F
1			1 各時代を代表する次の3つの絵画を見て、人々の価値が何から何に変化したか推測してみよう	エキスパート資料	2 ルネサンスから宗教改革を経て人々の価値の中心が「神」から「人間」へシフトした理由を考えてみよう。（エキスパート活動）	3 ルネサンスから宗教改革を経て人々の価値の中心が「神」から「人間」へシフトした理由を100字程度でまとめよう。（ジグソー活動後）その際エキスパート活動後の意見、各組の意見を参照し、参考となる部分を引用100字程度とは、＋10%程度 つまり90字から110字程度
2			キリスト教の偉い存在の人から農民たちが中心になった	A	学術グループを組織し芸術・学者を支援して、預め政治・外交などで優れた力を発揮したから。	修道院長が女性へ恋をしたり協会の免許状制度に不満を持つものが強からの批判が高まり、離れてゆき、どんどん神への信頼がなくなっていったから。（10組、自分の道が近オレンジの住人参考）
3			キリスト教の偉い人が中心だったけど16世紀になると、農民たち中心になった	A	コジモさんが市民を支配しその孫のロレンツォさんが受け継いで学術などを広めたから。	キリスト教関係者がこと（免許状やデカメロンなど）不信感が大きくなっていったから、市民は宗教よりも人間を中心にしていったから
4			高い身分の人から庶民的な人になった。	A	人々の指導者が神ではなく人間が重要だと考えるようになったから。	神に対する不満、不信が多くなり、人間にも優れた面があると思われ教から離れ人々は自分たちが最高指導者でなければならないと感じた（ムボード12）
5			最高権力者の中心から農民中心になった。	A	芸術によって、自由で個性を大事にして多様な考え方を広めたから。	キリスト教に対しての不信感が湧いていて神に対してのイメージがないと思う人がいて発展するにつれて人間の優れた面があると感じた（ムボード12組）
6			身分の高い人から低い人になった	B	修道院長が若い女性に恋をしてしまったことで批判が出たから	市民がキリスト教への信頼を失い、人々も神の存在を信じられなくなると価値の中心は人間であると考えたから
7			貴族視点から民衆視点になった	B	神の教えを知っている僧侶が何もできなかったから	ら理のよとあの「神だと思われていた人が信用されなくなったから」参照し、僕は修道院や僧侶といった神の教えを告げる人々への信頼が「神」から「人間」へ考え方がシフトしたと思いました。
8			高貴な人から民衆へと変わった。	B	ベストから離れた市民が助けを求めた僧侶が使えなかったから	
9			位が高い人から農民たちになった。	B	修道院長が女性に恋をしてしまい、キリスト教から批判が高まった。	修道院長が女性に恋し、協会の免許状制度に不満を持つものが現れキ批判が高まり離れて行く人が発生しコジモが学術グループを組織したか

○Google Jamboard（共同編集：ジグソー活動）



※著作権保護のため画像を一部加工しています。

<情報 I >

情報 I のプログラミングの単元では、昨年度から利用している Google Colaboratory に加え、ライフイズテック レッスンを学習環境として利用した。Google Colaboratory はクラウド環境でシートを共有して編集できることから、生徒の実習の様子を遠隔地からも確認でき、シートを生徒と教員がお互いにかけて、内容を確認することにより学習状況を授業者が把握しながら授業をすすめることができる。また、ライフイズテック レッスンには、e-ラーニング教材として設計されていることから、生徒自身がサービスの中で自らのペースで学習することができるものとなっている。

プログラミングの基礎的な部分は Google Colaboratory を使用し、授業者が説明しながら一斉方式で行い、演習ではペアやグループ学習で受信側の生徒がライフイズテック レッスンを用いて学習を行った。ライフイズテック レッスンには小テスト機能なども機能としてあり、学習の進捗を教師が確認しながら学習を進めることができること、繰り返し何度でも演習ができることから家庭学習としても利用した。

Google Colaboratory

The screenshot shows the Google Colaboratory interface for a file named '1_プログラミングの導入.ipynb'. The interface includes a search bar, a list of files, and a code editor. Annotations with arrows point to specific features:

- 指示事項等の記述 (Annotations for instructions, etc.)
- ノートとして記述可能 (Can be described as a note)
- プログラミングコードを入力 (Input programming code)
- 実行結果が表示される (Execution results are displayed)

ライフイズテック レッスン

The screenshot shows the Life is Tech! Lesson interface. The main area displays a 'Mom's Note' with a form for 'こんにちは' (Hello). The right sidebar contains instructions and a code editor. Annotations with arrows point to specific features:

- 実行結果表示 (Execution result display)
- 指示内容 (Instruction content)
- プログラミング入力 (Programming input)

<地理A>

地理Aの授業では地図や写真などの映像資料が授業において重要な要素である。教室前方で資料提示するだけではなく、生徒一人一台端末に資料配布して閲覧や編集作業を行うなどICT・クラウドとの相性がとても良い科目である。ある授業では、地図サイトの機能を使用して面積を計算したり、起伏のある地形をデータとして切り取り、断面の形状から地形の成り立ちなど分析したりするなど授業者が学習内容を指示し、生徒が教室にて各自の端末で作業を行いながら学習を進めていた。また、取組の中では自習について大きな気づきがあった。遠隔授業では、授業時間割の変更が困難であり、遠隔授業が行われる曜日、時間が固定されている。授業者が出張等で不在の時には自習授業となる。その際に、授業者があらかじめ用意していた学習内容により生徒が自習を行うのだが、生徒はタイマーによって送られてくる指示により、調査したり、まとめたり、グループで話し合ったりするが、一定時間が過ぎたところで次の指示が送られてくる。まるで教師が生徒の学習の進捗を見ながら次々と指示を出すように生徒の学習が進むというものである。これは、教師が一方的に説明をしたりする授業では実現できない方法であるが、主体的に学習に取り組むことができる生徒集団であれば、生徒が自ら学びを深めていくこれまでにない自習が実現できた。これは、授業者が遠隔地であり、もともと授業においても、同様の流れで授業がなされており、生徒が自ら学び取るという授業が実施できていたことの証明でもある。



■遠隔授業で使ったICT活用

- Google Classroom ⇒ 授業（課題）の指示出し 資料の提供 定期試験問題・解答・解説の掲示
- Google Jamboard ⇒ グループ活動の話し合いとそのまとめ
- Google Spreadsheets ⇒ 生徒の意見をシートに入力して相互に確認
- Google Forms ⇒ 他者との意見の比較 授業の振り返り
- Google Slides ⇒ 板書 動画視聴 実技指導（あらかじめ撮影した動画を使って）

■受信校での立会者の活動

- ①出欠確認
- ②発言する生徒へのマイク渡し
- ③配信者（授業者）不在の際の課題監督
- ④定期試験の印刷
- ⑤授業時の機器設定
- ⑥授業前後の授業者との打ち合わせ

■生徒の学習状況の見取り（形成的評価）

①Google Spreadsheets、Google Jamboard への意見記入、マイクを通じた意見発表から生徒の学習活動の見取りを行った。

3) 受信校で授業に立ち会う者の資質や役割

各受信校のサポート教員は、配布物の印刷、出席管理、機器の接続、教室の危機管理、授業者の支援等を主な役割とした。

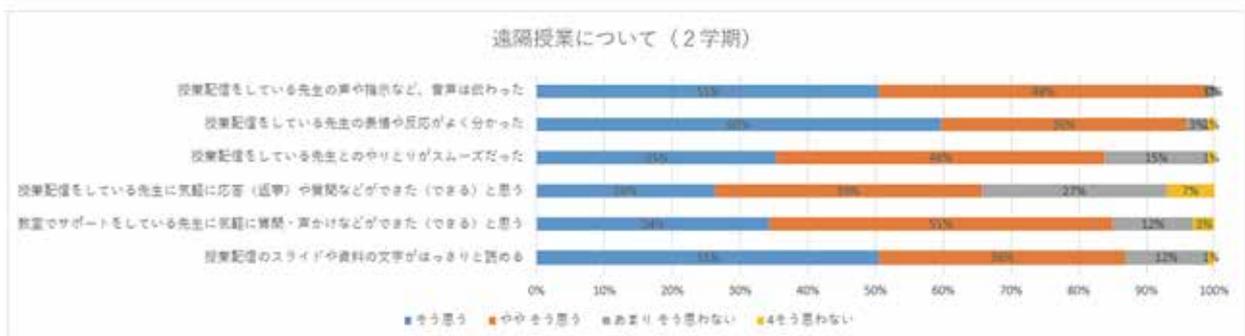
また、グループ活動など対話の時間についても授業者が遠隔で指示、見取りをしながら行い、サポート教員が活動を補助しながら行った。例えば、活動内容等を理解していない生徒やグループ活動が進まないグループに声かけを行うなど、授業がスムーズに進むことだけではなく、生徒の学習理解度が高まるようにサポート教員が授業者に協力して、より質の高い授業が実現できるように取組を行った。

4) 遠隔授業を受けた生徒の評価や変容

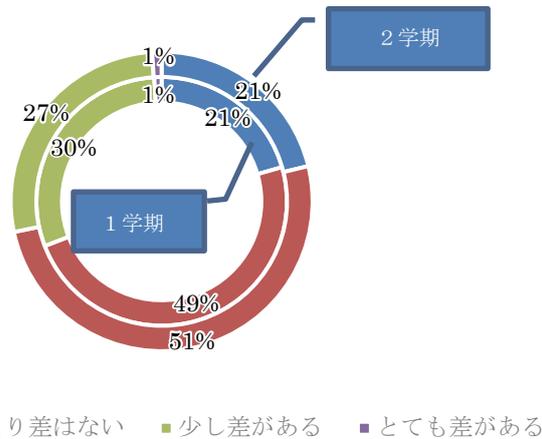
アンケート回答者（3校） 1学期（7月）107名、2学期（12月）99名

①遠隔授業について（4そう思う、3ややそう思う、2あまりそう思わない、1そう思わない）

	1学期	2学期
授業配信をしている先生の声や指示など、音声は伝わった	3.7	3.5
授業配信をしている先生の表情や反応がよく分かった	3.5	3.5
授業配信をしている先生とのやりとりがスムーズだった	3.1	3.2
授業配信をしている先生に気軽に応答（返事）や質問などができた（できる）と思う	2.8	2.8
教室でサポートをしている先生に気軽に質問・声かけなどができた（できる）と思う	3.2	3.2
授業配信のスライドや資料の文字がはっきりと読める	3.4	3.4

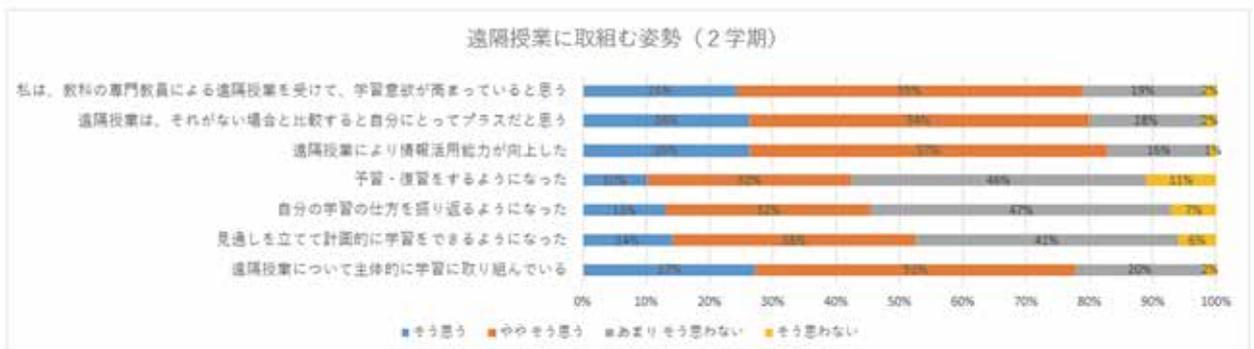
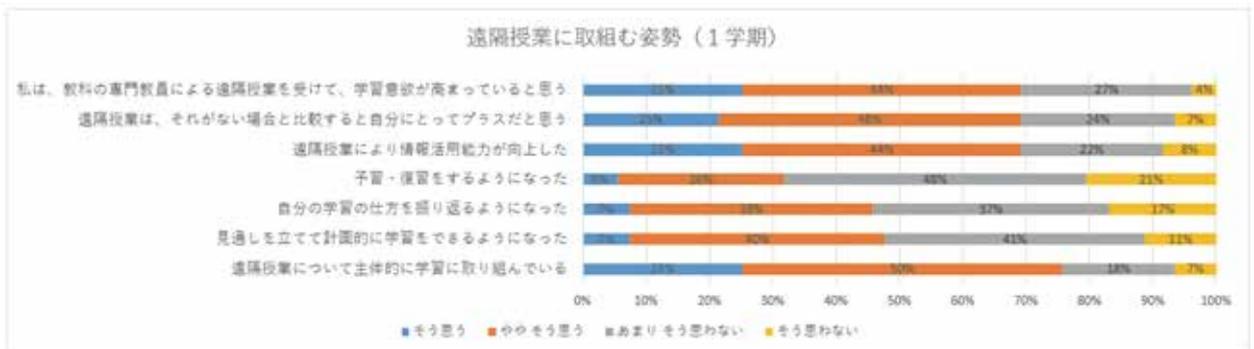


遠隔授業と対面授業（通常の授業）とで
学習の理解度に差がありますか？



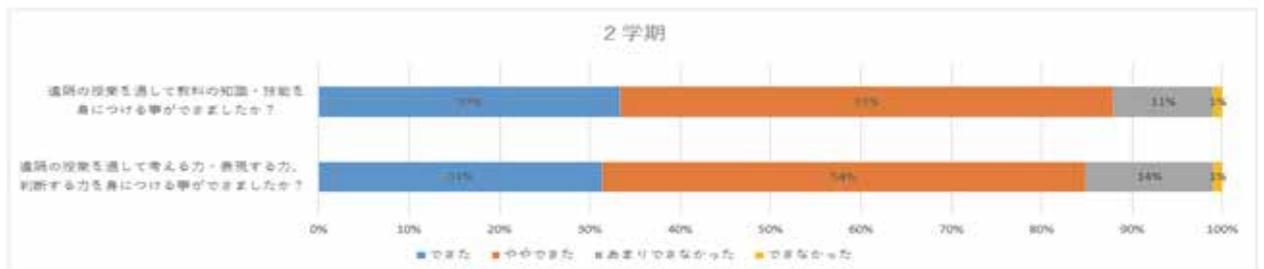
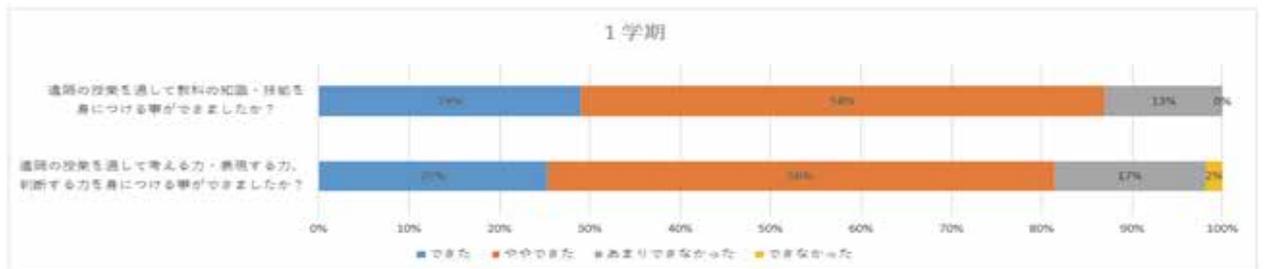
②遠隔授業に取り組む姿勢（4 そう思う、3 ややそう思う、2 あまりそう思わない、1 そう思わない）

	1 学期	2 学期
私は、教科の専門教員による遠隔授業を受けて、学習意欲が高まっていると思う	2.9	3.0
遠隔授業は、それが無い場合と比較すると自分にとってプラスだと思う	2.8	3.0
遠隔授業により情報活用能力が向上した	2.9	3.1
予習・復習をするようになった	2.2	2.4
自分の学習の仕方を振り返るようになった	2.4	2.5
見通しを立てて計画的に学習をできるようになった	2.4	2.6
遠隔授業について主体的に学習に取り組んでいる	2.9	3.0



③遠隔授業で身に付けたこと（4できた、3ややできた、2あまりできなかった、1できなかった）

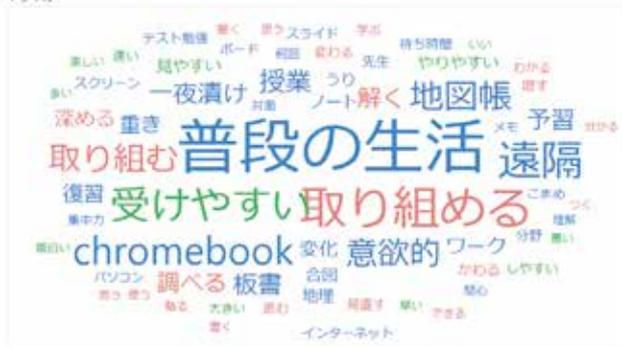
	1学期	2学期
遠隔の授業を通して教科の知識・技能を身につける事ができましたか？	3.2	3.2
遠隔の授業を通して考える力・表現する力、判断する力を身につける事ができましたか？	3.0	3.2



④自分の学習の仕方や取組の姿勢で変化したこと

ワードクラウド

1学期



2学期



ユーザーローカル AI テキストマイニングによる分析（<https://textmining.userlocal.jp/>）

単語分類①

1学期にだけ出現	1学期によく出る	両方によく出る	2学期によく出る	2学期にだけ出現
大きい わかる いい しやすい やりやすい 受けやすい 見やすい 速い 面白い ノート 書く 解く 言う メモ ワーク 何回 復習 かわる 上がる 取り組める 取る 受ける 増す 学ぶ 感じる 止まる 深める 置く 行う 見直す	多い 早い 調べる 先生	授業 変わる 変化 悪い 楽しい 取り組む 思う 予習 分かる 遠隔 つく 使う 聞く 進む 理解	できる 見る パソコン 使い方 対面 情報 機会	無い 考える 教科書 質問 うまい しにくい 少ない 良い 遠慮ない うえ お陰 お願い スピード テスト ペア 主体的 作業 倫理 問題点 回答 思考力 提出 活動 点数 熱心 物 理由 知識 積極 答え

ユーザーローカル AI テキストマイニングによる分析（<https://textmining.userlocal.jp/>）

単語分類②

名詞			動詞			形容詞		
1学期	単語	2学期	1学期	単語	2学期	1学期	単語	2学期
50	授業	50	100	わかる	0	100	大きい	0
0	教科書	100	0	考える	100	0	無い	100
0	質問	100	71	調べる	29	66	多い	34
37	変化	63	25	できる	75	66	早い	34
72	先生	28	52	変わる	48	100	いい	0
40	予習	60	35	取り組む	65	0	うまい	100
30	パソコン	70	35	思う	65	0	したくない	100
100	ノート	0	21	見る	79	100	しやすい	0
57	遠隔	43	45	分かる	55	100	やりやすい	0
0	つえ	100	100	書く	0	100	受けやすい	0
0	お席	100	100	解く	0	0	少ない	100
0	お願い	100	100	言う	0	50	悪い	50
0	スピード	100	62	つく	38	50	楽しい	50
0	テスト	100	62	使う	38	0	良い	100
0	ペア	100	62	聞く	38	100	見やすい	0

記述内容のまとめ (OpenAI 社の ChatGPT による編集)

① 1学期の記述内容のまとめ:

遠隔授業に関する感想:

- 普通の授業と変わらず、取り組む姿勢に変化なし。
- 先生が直接前にいないことで、気楽に授業を受けやすく感じる。
- オンライン授業の新鮮さや面白さに関するコメントあり。
- 配信授業の待ち時間を有効活用する取組が見られる。

学習方法や姿勢の変化:

- 一夜漬けから予習復習の重視へ。
- 地理分野への意欲向上。
- 分からない単語の即時調べ、自主的な学習行動の増加。
- 課題への取組強化。
- メモの習慣化や情報の積極的な検索行動。
- 教科書や資料の積極的な活用。
- 自主的な予習や復習の増加。
- 先生の話への注意力向上。

② 2学期の記述内容のまとめ:

学習方法や姿勢の変化:

- 教科書の積極的な活用。
- 予習への取組強化。
- 問題解決能力や主体的な学習の意欲向上。
- ペア活動による表現力や思考力の向上。
- 質問のしにくさへの対応と自主的な調査能力の向上。

オンライン授業に関する感想:

- 限られた時間内での作業能力の向上。
- 通信環境の問題を考慮した、授業への熱心な取組。

③ 変化と共通点:

両学期での共通点:

- 自主的な学習行動の増加。
- メモや情報検索などの学習補助ツールの活用。

- ・教材や資料の積極的な利用。
- ・先生の話への注意力向上。

1 学期から 2 学期への変化：

- ・予習や教科書の活用が強化された。
- ・問題解決能力や自主的な学習意欲の向上が見られる。
- ・オンライン環境での学習に対する対応力の成長。

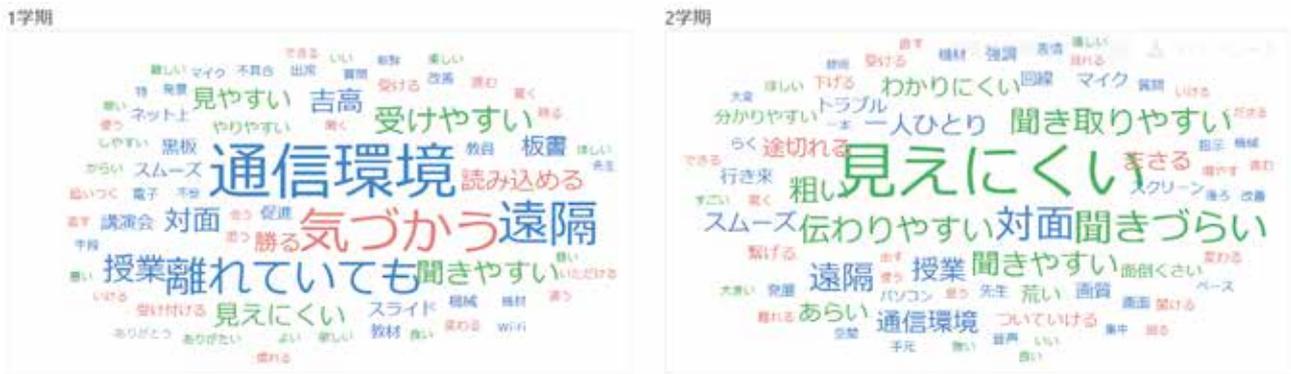
これらの分析結果では、1 学期は、生徒たちは、遠隔授業について、対面の授業との違いや新鮮さ、オンライン環境の利点などを記述しており、学習行動としては、予習復習の重視や地理分野への意欲向上、学習方法、課題への取組の向上などを記述している。さらに、メモの習慣化や教科書・資料の積極的な活用、教員の話への注意力向上など学習の取組の変化についても記述している。

2 学期は、学習方法や取組の姿勢に関する変化が見られる。例えば、教科書の積極的な活用や予習の強化、問題解決能力や自主的な学習意欲の向上が挙げられている。また、オンライン環境での学習への対応力の成長や、通信環境の問題を考慮した熱心な取組も特徴的な記述である。

1 学期と 2 学期のアンケート回答を比較すると、いくつかの共通点や変化が見られる。共通点としては、両学期で自主的な学習行動の増加や、先生の話への注意力の向上が挙げられる。一方で、1 学期から 2 学期にかけては、予習や教科書の活用が強化されたり、問題解決能力や自主的な学習意欲がより明確に表れたりする変化が見られる。このように、両学期のアンケート回答を通して、学生たちの学習方法や取組の姿勢における成長や変化が明らかになっていることがわかる。

⑤遠隔授業を受けてみての感想、またはよりよい遠隔授業にするための改善案

ワードクラウド



ユーザーローカル AI テキストマイニングによる分析 (<https://textmining.userlocal.jp/>)

記述内容のまとめ (OpenAI 社の ChatGPT による編集)

① 1 学期の記述内容のまとめ：

- ・通信環境への不満と技術の向上に関する要望。
- ・授業のペースや理解に追いつかないと感じる点。
- ・遠隔授業と対面授業の比較で、遠隔でも十分な授業が受けられるという肯定的な意見。
- ・機材や技術の更新が必要であるとの意見。

② 2 学期の記述内容のまとめ：

- ・通信環境の改善への要望が依然として存在し、回線の品質についての不満が続いている。
- ・授業の進行や理解の面に関する不満は減少しているが、新たな問題点も発生している。
- ・遠隔授業と対面授業の比較では、遠隔授業の向上により対面授業との差異が減少している可能性がある。
- ・機材や技術の向上に関する要望が引き続き存在している。

③ 変化と共通点:

- ・両学期ともに通信環境の改善や機材・技術の更新が求められている。
- ・1学期に比べ、2学期では授業の進行や理解の面に関する不満が減少し、遠隔授業の品質が向上しているという共通点が見られる。
- ・両学期ともに遠隔授業と対面授業の比較があり、遠隔授業でも十分な授業が受けられるとの肯定的な意見が見られる。

生徒アンケートから、昨年度は遠隔授業の回数が進むにつれ、前向きな表現から後ろ向きの表現に移っていたが、本年度は遠隔授業が進んでも授業進行、理解の面での不満が減少するなど遠隔授業の質が高まっていることがわかる。これは、クラウド活用など遠隔での授業の進め方のノウハウがたまり授業改善が進んだことが一つの要因であると考えられる。また、学校の中でも遠隔授業が定着して特別なものでなくなったことなどもあると考えられる。一方で、映像や音声、指示の伝わりにくさなどまだ課題は残っていることから、継続的に改善に向けて検討していく必要がある。

また、対面ではなく遠隔でも専門の教員から授業を受けることができることなどのメリットを上げる生徒もいることから、本事業の取組のニーズは一定数あるものと考えられる。

5) 持続可能性のある遠隔授業の環境・支援体制について

各校の授業担当、探究担当者、事務職、管理職など、複数の連絡役、事業運営上の課題等の把握等を主幹教諭が窓口として行うことで学校間の連絡がスムーズに進行した。基本は行政チャット、Google Classroomなどのツールを組み合わせることにより、負担の軽減につながった。

一方で、学校を拠点とする配信において授業担当教員の負担、授業者の勤務校での役割分担などから、学校を配信拠点とするメリットよりもデメリットの方が大きかった。

2.5. 考察

(1) 成果

- ・Web会議システムや生徒1人1台端末の活用により、遠隔での単位認定を伴う授業が可能であることが実証できた。
- ・受信校側生徒のアンケート結果より、専門性の高い教員の授業に対して、満足感を示す回答が多く見られた。
- ・クラウド等の機能を活用することにより対話等の主体的な学習場面を行い、評価まで行うことができることが実証できた。
- ・受信校側の教員の負担感（教材準備に係る時間を多くとられること等）の軽減につながった。

(2) 課題

- ・本事業においては、全ての授業時間を遠隔で行った場合、生徒の学習意欲の維持や授業内容の理解度の向上を図ることが難しいと考え、1学期中間試験（4月～5月中旬）までや定期試験の前などは、配信校側の教員が受信校に赴き対面で授業を行っている。これは、国が示す基準である年間2単位時間の対面授業では、生徒との信頼関係の醸成や生徒の学習の理解度の確認、評価が困難であると考えているからである。授業者が頻繁に受信校を訪問することはメリットも大きいですが、授業者の負担が大きいことが課題である。本検証において、適切な対面授業時数などの検証ができなかった。このことについては、今後も機会があれば研究を進めていきたい。

- ・教員の人事配置の面でも、必ずしも配信校に遠隔授業の対象となる科目を専門とする教員が配置されるわけではなく、この体制の持続可能性の面からも課題がある。
- ・遠隔授業の他に、大学との連携を通じた高大連携による学力向上、各学校のコンソーシアム間での連携を通じた地域課題解決型学習等における協働的な学びの推進を目指したが、十分な成果は得られていない。

2.5.1. 目標設定シートに対応した成果と課題

1. 本構想において、実現する成果目標の設定（アウトカム）

(1) 学びの基礎診断等により把握する生徒の学力の定着・向上の状況

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値			3.0以上	3.2以上
実績値			3.0	3.29
把握のための測定方法及び指標	遠隔授業に対する授業アンケート（各学期）から、各観点別評価の項目に係る質問（4～1）に対し肯定的な回答をした生徒の割合（配信科目受講生徒平均）（4点満点における80%の3.2が最終目標値）			

（成果）

授業アンケートにより、知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体的性など生徒が遠隔授業を通して学びに向かう姿勢をより強く持つことができた。遠隔授業において、情報活用能力が高まったことを自覚している。

(2) 地域課題の解決等の探究的な学びに関する科目等の数（総合的な探究の時間を含む。）

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		16	16	16
実績値	16	16	16	16

（参考）上記のうち、学校設定科目の数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		11	11	11
実績値	11	11	11	11

（成果）

目標値どおり。引き続き、各学校において、グランドデザイン実現のために教育課程の見直しを進める。

(3) 免許外教科担任制度の活用件数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		5	2	1
実績値	5	5	3 (益田1(書)) (吉賀2(美・音))	3 (益田1(書)) (吉賀1(音)) (津和野1(美))
構成校の数	4			

（成果）

免許外教科担任制度の活用は芸術分野において3教科あった。本事業に関する教科（情報、地歴・公民）については、遠隔授業により免許外教科担任制度を使用することがなかった。

(4) その他、管理機関が設定した成果目標

成果目標①：取組を通じて育成を目指す資質・能力（地域愛の醸成）に関する生徒の意識変容

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値			73.0%	75.0%
実績値	71.2%	69.0%	68.8%	69.5%
目標設定の考え方	高校魅力化アンケートの質問項目「将来、自分の住んでいる地域のために役に立ちたいという気持ちがある。」に肯定的な回答をした生徒の割合（4校平均）			

(成果と課題)

本事業1年目終了時の数値に比べると、若干ではあるが肯定的な回答をした生徒の割合は高まったが、令和2年度の実績値から定めた目標値には届かなかった。ただ、10ポイント程度高くなった学校もあり、意識変容の背景にどのような取組があったのかを改めて検証していきたい。

また、4校の平均値は、令和5年度の県平均(11445人対象)73.2%よりは低くなっているが、全国平均(115486人対象)66.5%に比べると高くなっており、地域への貢献意欲は一定程度育っていると考える。

成果目標②：取組を通じて育成を目指す資質・能力(主体性)に関する生徒の意識変容

	2年度(実績)	3年度	4年度	5年度
目標値			62.0%	65.0%
実績値	59.0%	60.8%	64.2%	65.5%
目標設定の考え方	高校魅力化アンケートの質問項目「地域社会の魅力や課題について、自主的にテーマを設定し、フィールドワーク等を行いながら調べ考える学習に対して、熱心に取り組んでいる。」に肯定的な回答をした生徒の割合(4校平均)			

(成果)

各学校において探究学習が定着してきており、地域に出かけたり、地域の方々と関わったりしながら、学びの充実が図られていることが回答からも読み取れる。今回指標にはしなかった他のアンケート項目の集計からも、生徒の主体性が確実に育っていることがうかがえた。

(課題)

地域に関する学習等については全国の平均値と比べても高い肯定的割合を示す一方で、一歩外に出た日本や社会への関心、新しいことへの挑戦意欲、客観的データに基づく考察といった点においては物足りない結果となっている。今後は、そうした意欲や力を育むためには何が必要かも考えていきたい。

成果目標③：遠隔授業に対する生徒の満足度の変容

	2年度(実績)	3年度	4年度	5年度
目標値			3.0以上	3.2以上
実績値			3.4	3.24
目標設定の考え方	遠隔授業に対する授業アンケート(各学期)から、授業満足度(4~1)に対し肯定的な回答をした生徒の割合(配信科目受講生徒平均)(4点満点における80%の3.2が最終目標値)			

(成果)

遠隔授業の授業手法等の蓄積がすすみ、授業者がクラウドを駆使した授業デザインにしていた結果、目標値を上回る実績値となった。ネットワークの通信状況による不満も一部あるため、機器等についても今後も研究を行っていきたい。

2. COREハイスクール・ネットワークとしての活動指標(アウトプット)

(1) COREネットワークの構成校における遠隔授業の実施科目数

	2年度	3年度	4年度	5年度
実績	0	0	4	4
見込み		0	4	5

(成果)

- 益田高校 → 津和野高校 1. 倫理
- 益田高校 → 江津高校 2. 倫理 3. 情報I×2クラス
- 益田高校 → 吉賀高校 4. 地理A
- 島根県教育センター → 吉賀高校 5. 情報処理(商業科) ※スポット配信

(2) 地元自治体等の関係機関とコンソーシアムを構築している学校数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
実績	4	4	4	4
見込み		4	4	4

(成果)

本事業以前から各学校においてコンソーシアムが構築されている。年数が経つにつれ、共有できる事例等が増え、活動の中身や体制も充実してきている。コンソーシアム体制の見直しをする高校と自治体も出てきており、主体的に取り組む機運が醸成されつつある。

(課題)

高校と自治体それぞれにおいて、職員のコンソーシアムに対する理解の濃淡がある。コンソーシアムが効果的に機能するためには、自治体において、様々な課が横断して協働することが重要であると考えている。

(3) その他、管理機関が設定した活動指標

活動指標①：遠隔授業の公開授業時数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
実績	0	0	1	4
見込み		4	4	4
活動指標の考え方	校外に対する遠隔授業の公開授業の時数			

(成果)

9月、12月にそれぞれ2教科を県立高校、COREハイスクール管理機関等を対象として授業を公開し、本事業の成果を発表した。

活動指標②：成果発表の場の回数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
実績		0	0	2
見込み		1	2	4
活動指標の考え方	構成校以外の学校等を対象とする成果発表の場の回数			

(成果)

公開授業と併せて、遠隔授業についての理解が広がるように対面、遠隔を組み合わせる成果発表を行った。

3. コンソーシアム構築による教育の高度化・多様化に関する取組

平成31年2月に県教育委員会が策定した「県立高校魅力化ビジョン」では、その第1章に「『生きる力』を育む魅力ある高校と地域づくりの推進」が掲げられ、さらに具体的な取組として「教職員、生徒・保護者、市町村、小・中学校、大学、社会教育機関、地元企業、地域住民、関係団体等の多様な主体が参画し、魅力ある高校づくりに取り組む協働体制（「高校魅力化コンソーシアム」）を、全ての高校に構築する。」と書かれている。このビジョンに沿って、令和3年度中に全ての県立高校でコンソーシアムが構築され、また令和4年度以降は構築されたコンソーシアムの取組・活動を推進していくといったスケジュールが示された。推進のために全ての高校・地域に対して行う研修等を通じて、CORE4校の「コンソーシアム構築による教育の高度化・多様化に関する取組」を進めることにもなると考えている。詳細は、「3.4 取組概要 (1) コンソーシアムの充実」に述べる。

また、「県立高校魅力化ビジョン」では、全ての高校において、市町村、大学、社会教育機関、地元企業等と連携し、地域等を題材とした課題解決型学習を行うことで、生徒の学びの質を高め、必要な資質・能力を育成することとしている。こうした学習を推進するために、探究学習推進を担う指導主事を配置し、各校の探究学習推進担当教員を対象に、年間を通じた研修を実施している。2月には、全ての高校が参加して探究学習の発表を行う「しまね探究フェスタ」を開催し、生徒同士が学び合う機会と探究活動の質を高めるためのあり方を学校及び地域とともに考える機会を創出した。(R5年度:生徒246名、発表数73、司会・サポーター・ファシリテーターとして大学教員や社会人・大学生等59名が参加)

3.1. 調査計画

年月	実施内容 (●全体 ■各校)	県の取組 (全県で実施)
令和5年 4月	●第1回4校運営調整会 ■地域課題解決型学習	○第1回コンソーシアム運営マネージャー勉強会
5月	●4校主幹教諭連絡会 ■地域課題解決型学習	○第1回グランドデザインPDCA研修 ○第1回探究学習推進担当者研修 ○地域との協働体制構築・運営研修 ○高校魅力化アンケート実施説明会 ○第1回コーディネート人材研修
6月	■コンソーシアム役員会 ■高校魅力化アンケート(～7月) ■地域課題解決型学習	○学校訪問 (コンソーシアム・探究学習等の聞き取り)
7月	●探究学習4校合同発表会 ■地域課題解決型学習	○第2回コンソーシアム運営マネージャー勉強会 ○先進地視察(北海道) ○コンソーシアム市町村訪問(～8月) ・探究学習ミニ研修
8月	■地域課題解決型学習	○高校魅力化アンケート活用研修 ・テーマ推進ミーティング
9月	■地域課題解決型学習	○第2回探究学習推進担当者研修
10月	■地域課題解決型学習	○第2回グランドデザインPDCA研修 ・探究学習ミニ研修

1 1 月	●探究学習 4 校合同交流会 ■地域課題解決型学習	○第 2 回コーディネーター研修 ○学校訪問（～12 月） （コンソーシアム・探究学習等の聞き取り） ・テーマ推進ミーティング
1 2 月	●第 2 回 4 校運営調整会 ■学校評価アンケート ■探究学習成果発表会（～3 月） ■地域課題解決型学習	・探究学習ミニ研修
令和 6 年 1 月	■高校魅力化アンケート（任意） ■地域課題解決型学習	○事業成果報告会
2 月	■コンソーシアム役員会 ■地域課題解決型学習	○しまね探究フェスタ （兼 第 3 回探究学習推進担当者研修） ○第 3 回グランドデザイン PDCA 研修
3 月	●第 3 回 4 校運営調整会 ■地域課題解決型学習	

3.2. 実施体制

実施体制については、「2. 遠隔授業の実施やその運営体制に関する取組」の「2.2 実施体制」と同じであり、各校コンソーシアムの体制については以下のとおりである。

益田高校	江津高校	津和野高校	吉賀高校
益田市	江津市教育委員会	財団法人つわの学びみらい	島根県議会議員
益田市教育委員会	江津高等学校	津和野町教育委員会	吉賀町役場
益田商工会議所 (松永牧場 シマネ益田電子)	江津工業高等学校	津和野町教育魅力化推進協議会	吉賀町議会
益田市公民館	江津清和養護学校	津和野町営英語塾HANKOH	吉賀高等学校振興会
益田青年会議所	島根県立大学	津和野高校後援会	吉賀高等学校同窓会
益田市幼稚園協議会	ポリテクカレッジ島根	津和野高校同窓会	吉賀町教育委員会
益田市保育研究会	江津市校長会	津和野高校	吉賀高等学校PTA
益田市小学校長会	江津市保育研究会		吉賀町小中学校長会
益田市中学校長会	江津市PTA連合会		七日市公民館
益田市PTA連合会	江津高校卒業生会		吉賀町商工会
益田高校	江津工業高校卒業生会		吉賀高等学校学校評議員会
益田翔陽高校	江津清和養護学校卒業生会		吉賀高等学校
明誠高校	江津市商工観光課		
益田東高校	江津市地域振興課		
益田養護学校	島根県西部県民センター		
島根県立大学	NPO法人てごねっと石見		
一般社団法人 豊かな暮らしラボラトリー			

3.3. 取組概要

3年次の今年度も、「3.1 調査計画」に沿って取組を行った。

各校ともスクール・ポリシーをコンソーシアム内で共有し、共通のビジョンのもとに取組を進め、コンソーシアムの体制を活かしながら、地域と協働した学習活動や課外活動等に年間を通して取り組んだ。県教育委員会でも、「コンソーシアム構築による教育の高度化・多様化に関する取組」を進めるために、年間を通じて研修や支援を行った。

具体については、「3.3.1 地域と協働した取組実績」「3.4 取組内容」に記載する。

3.3.1. 地域と協働した取組実績

コンソーシアム名	主な取組
県立学校 GO▶GOTSU コンソーシアム (江津高校)	<ol style="list-style-type: none"> ① 地域の大人66人と一対一で語り合う「GOTSUミニトークフェス」 ② 地域で活躍する大人から、社会や地域の一員としての生き方・暮らし方を学ぶ「GOTSUヒトコトモノツアー」 ③ 江津地域で活躍する職業人の生き方や考え方を理解し、地域と自身の関わりを意識する「GOTSUビトインタビュー」 ④ 立場や世代の異なる地域住民や県立大生と協力した催しの企画（古民家学生イベント、つぬさんぽ） ⑤ 地域の外部資源と繋がりながら、魅力発信のための広報のチーム体制を構築するなど、GO▶GOTSUコンソーシアム内の連携を深めながら地元や江津工業高校、江津清和養護学校との協働体制を推進 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> (GOTSUヒトコトモノツアー) (つぬさんぽ) </div>
益田市未来の担い手 育成コンソーシアム	<ol style="list-style-type: none"> ① 地域課題解決型学習【地域巡検、地域ラボ、課題研究、課題探究】 ② 小学生に向けた理科系授業の実施【出前実験、理科読を楽しむ会】 ③ 中学生に向けた理科系実験機会の提供【サイエンスキャンプ】 ④ 地元企業と連携した商品のアイデアの提案【地域ラボ】 ⑤ 地域社会に開かれた学校づくり 【益田未来協働フェスタ】…小中学校・地域・地域外との関わりづくりと 地域における理数教育の活性化 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> (出前実験) (地域巡検) </div>

吉賀高等学校支援
協議会

- ① アントレプレナーシップ教育
 - ・地域の方の指導を受け、3年生は7月に「最終発表会」で、1・2年生は12月に「校内発表会」で各プロジェクトの成果を発表。2月に「アントレプレナーシップ教育成果発表会」を実施。教育の成果をまとめた「キャリア教育報告集」の発行。
- ② スタディキャンプ
 - ・学習活動を通じた、中学3年生と吉賀高校生・OBとの関わり
- ③ 地域との交流活動・部活動の魅力化・活性化支援
 - ・保小中、地域との交流・連携活動の実施
 - ・専門的スキルや知識を持つ講師の指導等による部活動の魅力化・活性化支援
- ④ 町と協働した学校PR、募集活動
 - ・学校案内の作成、「しまね留学」「地域みらい留学」への参加、県外生徒募集



（『花いっぱい』プロジェクト）



（『サッカー教室』プロジェクト）

一般財団法人
つわの学びみらい

- ① 「総合的な探究の時間ツコウト-PLAN」
 - ・地域内外の外部講師を活用した地域体験型の選択制講座「ブリコラージュゼミ」の実施
 講師：天文台ガイド、版画家、モルック指導者、元JICA青年海外協力隊、林業関係者、農家、呉服屋、茶業経営者、フードデザイナー、ヨガインストラクター、町会議員等
 - ・町民と一対一で対話する「トークフォークダンス」の実施
 - ・地域内外の伴走者の協力によるプロジェクト型学習。大学教員及び卒業生等を招聘し、生徒全員が発表し講評を受ける機会を設定。
- ② 「高校魅力化学生サポーター受け入れ事業」
 - ・外部講師としてまた講評者として現役大学生の受け入れを実施
- ③ 生徒募集
 - ・学校案内と卒業生インタビュー集の作成・印刷、津和野高校Webサイトの改修、地域みらい留学への加盟と募集活動の展開



（ブリコラージュゼミ：日原文天台）



（トークフォークダンス）

3.4. 取組内容

「1.2. 本事業を通して明らかにしたい事項（調査研究テーマ）」は、

- (1) コンソーシアムの充実
- (2) オンラインを活用した学校間連携による探究学習の深化
- (3) 探究学習やキャリア教育におけるオンラインによる地域を越えた外部人材活用の可能性の3点である。

それぞれについて、3年間の取組内容や成果と課題等についてまとめる。

(1) コンソーシアムの充実

<1年次>

前述したとおり、CORE 事業に取り組む4校には、本事業が始まる以前からコンソーシアムがあり、各コンソーシアムで高校と地域の協働活動をすでに進めていたことから、本事業では4校のコンソーシアムを連携させることで各コンソーシアムの充実を図ろうと考えた。そこで、1年次は各校の活動実態の把握を行い、連携できる部分がないかを探った。

- <益田高校> ・ 益田版カタリバ…高校生が地域の若手人材との対話を通して、自分の将来や地域の魅力などについて考える進路探究学習
- <津和野高校> ・ ブリコラージュゼミ（1年生）、マイプロジェクト活動（2年生）を支援
 - ・ トークフォークダンスの企画と参加
 - ・ 探究学習等に関わる人材のマッチングサイト開設
- <江津高校> ・ 県立大学…バーチャル国際交流会（通年）参加、ラオス絵本プロジェクト
 - ・ 江津市都野津町…街プロジェクト、古民家プロジェクト、小学生学習支援
- <吉賀高校> ・ アントレプレナーシップ教育における都市部大学生の伴走
 - ・ 目線合わせ講演会（教員、地域伴走者対象）の実施

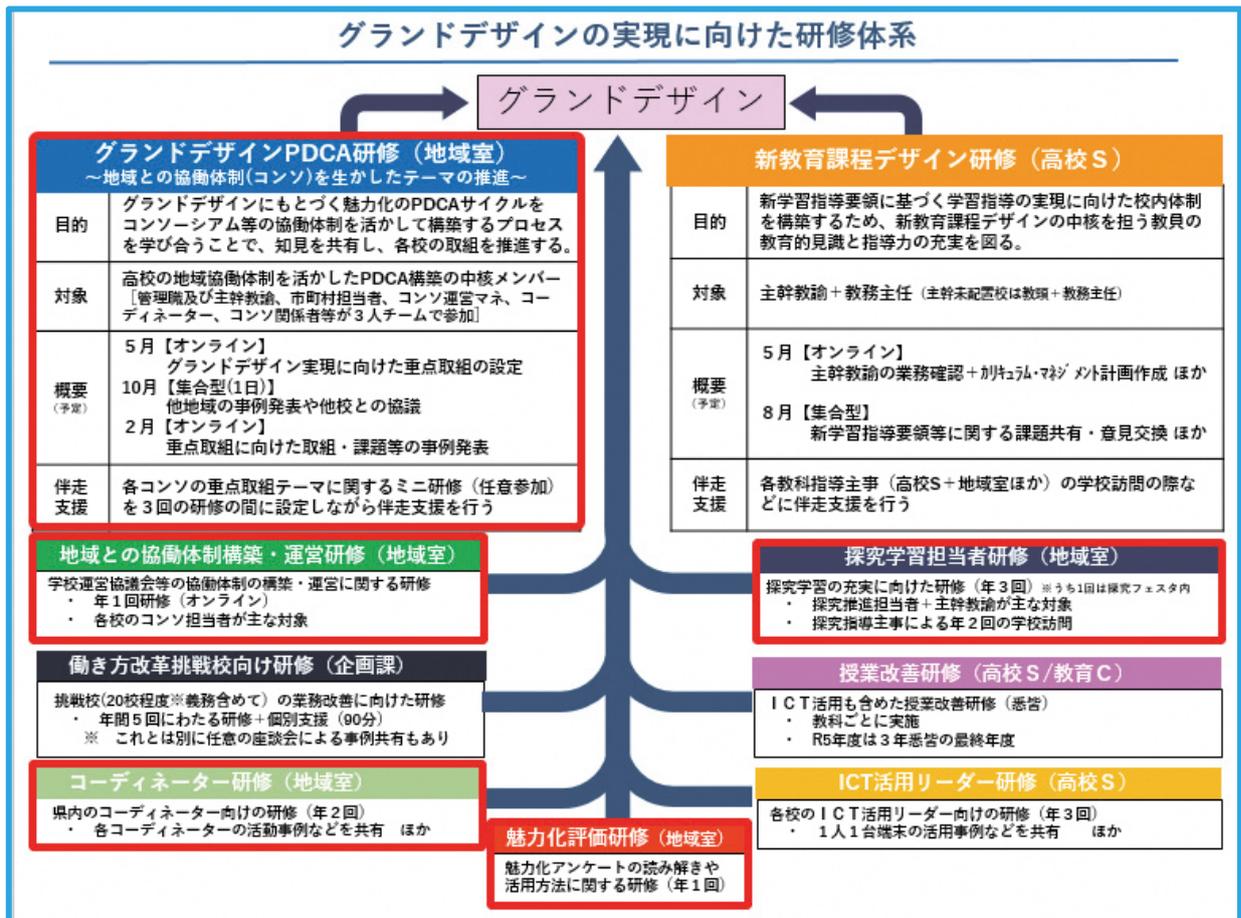
1年間連携を模索する中で、上記のとおりすでに各校で独自の連携や取組が進み、また私立高校や特別支援学校を含めた複数校でコンソーシアムを構築している学校があることから、4校のコンソーシアムで連携した活動を行うことは難しいと考えた。

<2・3年次>

そこで2年次以降は、ちょうどすべての高校でコンソーシアムが構築され、全コンソーシアムに対し、取組推進に向けた研修等を実施するタイミングでもあることから、研修を通してCORE4校についてもその充実が図れるのではないかと考えた。

島根県では、CORE4校を含め、全ての県立高校のコンソーシアムを対象に右図にある研修等を実施し、協働体制の推進・充実に向けて取り組んでいる。赤枠の研修が地域との連携に関わる研修であり、特に左上の「グランドデザインPDCA研修」は、学校と地域の関係者3名がチームで参加する研修で、他ではあまり例のない研修ではないかと考えている。

以下、「グランドデザインPDCA研修」の内容について詳しく記述していきたい。



グランドデザイン PDCA 研修

目的：① 「県立高校魅力化ビジョン」を踏まえたグランドデザインの実現に向けて、地域との連携による協働体制構築の必要性を理解する。

② グランドデザインに基づく PDCA サイクルに必要な視点を理解し、グランドデザイン実現に向けた重点的取組を検討する。

対象：管理職及び主幹教諭から1名、コンソーシアム関係者、コーディネーター等から2名の計3名で、年間を通じて協働できるチームで参加

内容：

【R4年度（2年次）】

第1回（オンライン：2h）

自校のグランドデザインにもとづく重点的取組を検討し、設定する

第2回（対面2会場：1日）

第1回で設定した取組の進捗状況を確認し、高校魅力化アンケートの結果等を踏まえた改善案について協議する。

第3回（オンライン：3h）

自校の重点的取組についての成果・課題の発表と次年度の取組の検討を行う。

【R5年度（3年次）】

第1回（オンライン：2h）

自校のグランドデザインにもとづく重点的取組を「高校魅力化コンソーシアム充実に

向けた項目一覧」に紐付けして検討・協議を行う。

第2回（対面1会場：1日）

第1回で設定した取組の進捗状況や高校魅力化アンケートの結果、また他コンソーシアムの事例や参加者による対話等を踏まえ、「次の一手」について協議する。

第3回（オンライン：3h）

自コンソーシアムの重点的取組の当該年度評価を言語化し、次年度の取組の検討を行う。



今年度の研修では、昨年度使用した重点取組ワークシートをバージョンアップし、さらにコンソーシアム充実に向けたルーブリックを活用しながら、年間を通しての研修を実施した。

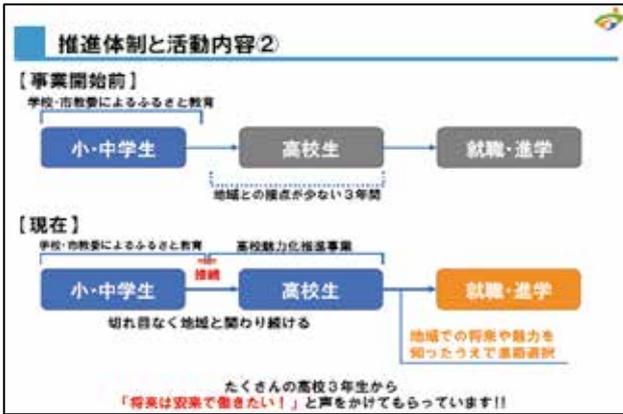
令和5年度 第1回オンラインPDCA研修 (5/18)		重点的取組	
研修日時	5/18(水) 14:00~16:00	研修内容	重点的取組の進捗確認と評価
研修場所	オンライン	研修参加者	各コンソーシアム代表者
研修趣旨	重点的取組の進捗確認と評価	研修目標	重点的取組の進捗確認と評価
研修内容	重点的取組の進捗確認と評価	研修成果	重点的取組の進捗確認と評価
研修評価	重点的取組の進捗確認と評価	研修改善	重点的取組の進捗確認と評価

重点的取組ワークシート

高校魅力化コンソーシアム
充実に向けた項目一覧
(ルーブリック)

項目	評価	取組	進捗	評価	取組	進捗	評価	取組	進捗
重点的取組	1	重点的取組の進捗確認と評価							
	2	重点的取組の進捗確認と評価							
	3	重点的取組の進捗確認と評価							
	4	重点的取組の進捗確認と評価							
	5	重点的取組の進捗確認と評価							
	6	重点的取組の進捗確認と評価							
	7	重点的取組の進捗確認と評価							
	8	重点的取組の進捗確認と評価							
	9	重点的取組の進捗確認と評価							
	10	重点的取組の進捗確認と評価							

第2回研修では4つの自治体や高校から事例発表を行ってもらったが、その中には CORE 事業を実施している吉賀高校、益田市も含まれている。



安来市

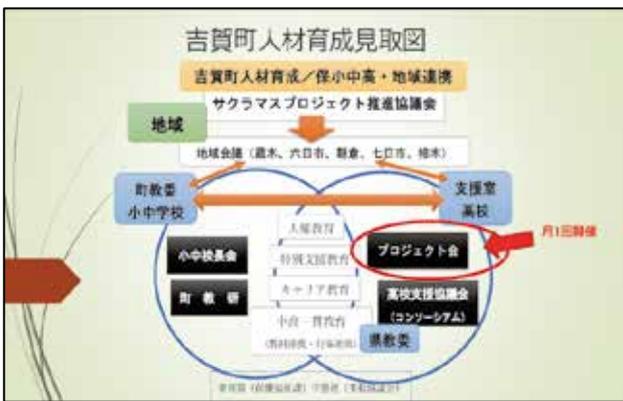
I 目指せ！ 文科省事業からの脱却
 平田高校 R元年～3年 文科省事業
 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」

- ・事業対応を主目的としたコンソーシアム立ち上げ
- ・コンソーシアム会議と文科省事業運営指導員会の同時開催

当然 会議の内容は・・・ → **なんか違うかも??**

少しずつコンソーシアムっぽくしていこう!

平田高校



吉賀高校



益田市 (一般社団法人豊かな暮らしラボラトリー)

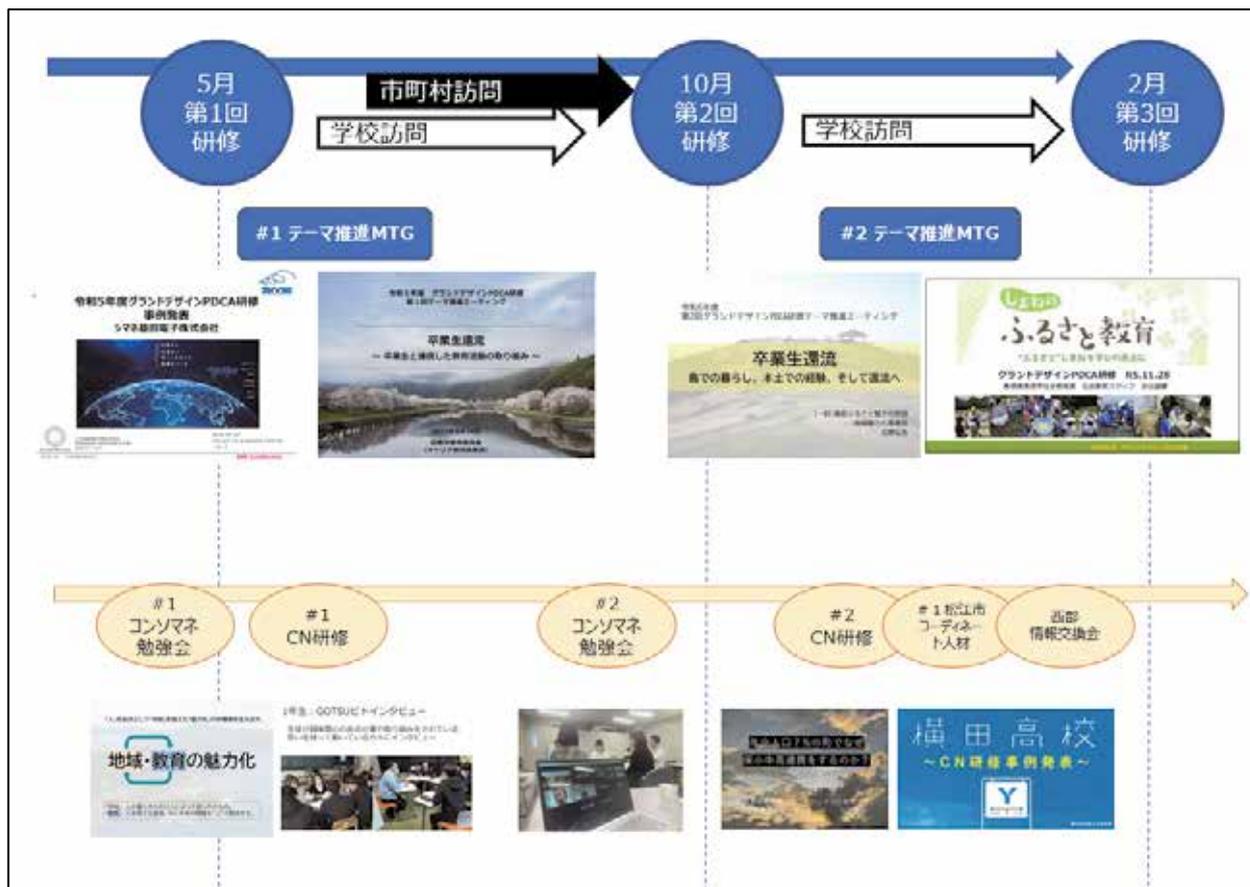
事例発表の後には、以下の9つのテーマの中から参加者自身が関心のあるテーマを選び、用意された場所に行って話をすることで、それぞれの学びを深めることができた。

- ① 複数校所属のコンソーシアムの運営について
- ② コンソーシアムにおける学校と市町村及びその他の団体の役割分担について
- ③ コンソーシアムにおける生徒募集に関する広報活動について
- ④ コーディネーター、運営マネージャー不在のコンソーシアムの運営方法について
- ⑤ 専門高校におけるコンソーシアムの役割について
- ⑥ コンソーシアムと学校運営協議会の持ち方の工夫について
- ⑦ 都市部のコンソーシアム体制の整備について
- ⑧ 生徒の活動を支えるための地域の主体的な取組について
- ⑨ 行政機関と学校によるグランドデザイン周知の工夫について

また、今年度は3回の研修の間に、4回のテーマ推進ミーティング(希望者参加)をオンラインで実施した。

- ① 8/22 「産業界連携」 シマネ益田電子株式会社
 経営企画室次長 兼 業務統括部総務課 課長 山形 圭 氏
 参加者：11名 「参考になった」「まあまあ参考になった」：100.0%

- ② 8/24 「卒業生還流①」 雲南コミュニティハイスクールコンソーシアム
雲南市教育委員会キャリア教育政策課 福島 勇樹 氏
参加者：11名 「参考になった」「まあまあ参考になった」：87.5%
- ③ 11/21 「卒業生還流②」 一般財団法人島前ふるさと魅力化財団 地域魅力化事業部
還流コーディネーター 近藤 弘志 氏
参加者：10名 「参考になった」「まあまあ参考になった」：100.0%
- ④ 11/28 「小中高連携」 社会教育課 社会教育スタッフ
企画幹（兼）社会教育主事 京谷 雄輔 氏
参加者：13名 「参考になった」「まあまあ参考になった」：90.0%



「グランドデザイン PDCA 研修」のほかにも、コンソーシアム運営マネージャーや魅力化コーディネーターに向けた勉強会や研修、コーディネーター等へのヒアリング、指導主事によるコンソーシアム及び探究学習に係る学校訪問、スタッフのコンソーシアム会議への参加等を行いながら、各コンソーシアムの実態把握と取組の推進に努めている。

また、今年度は県内全 19 市町村のうち、コンソーシアムを構築している 16 の自治体へのヒアリング訪問を実施し、「所在する高校への期待」「高校（コンソーシアム）へのかかわり方」「メリット」「コンソーシアムを通じて目指したいこと」「現状と課題」「他部局との共有状況」「今後力を入れたこと」「高校への要望」「県教委への要望」などを聞き取った。コンソーシアムの構築を「県立高校魅力化ビジョン」に掲げ、自治体から多くの支援を受けながらともに魅力ある高校と地域を創っていくうえで、直接話をすることはとても有意義である。また、高校魅力化が始まって数年が経過する中で担当者が代わる自治体も多く、改めて魅力化やコンソーシアムについて説明をする場が必要であると感じている。地域の理解も、コンソーシアムの充実には欠かせない要素である。

(2) オンラインを活用した学校間連携による探究学習の深化

<2年次>

○ 探究学習2校合同実施（吉賀高校⇄津和野高校）

放課後の時間を使って、各校2チームがそれぞれの探究学習の取組を発表し、意見交換を実施した。当初は、「総合的な探究の時間」を活用し、クラス全体で発表・意見交換を行うことを検討したが、授業進度の違いや異なる時程での時間調整が難しく、放課後に一部のグループのみで実施することとした。参加者の満足度は高いものであった。



<3年次>

○ 探究学習発表4校合同実施（対面）

益田高校が主催する「益田未来協働フェスタ」に、江津高校、吉賀高校、津和野高校の代表生徒が参加し、授業等で取り組んでいる探究学習の成果等を発表した。益田高校の1年生が参観し、発表後には活発な質疑応答・意見交換が行われていた。参観した生徒にとっては、今後行う予定の自身の探究学習へのヒントを得るなど学びがあった。益田高校以外の生徒にとっては、発表への打ち返しをもらうことで探究を深化させることにつながった。一方で、3校の生徒は益田高校の発表を聞くことができなかったので、今後は仕立てを考えていく必要がある。また、このフェスタは土曜開催だったために、3校にとっての負担がどうだったのかを振り返る必要がある。



○ 探究学習交流会（オンライン）

当日益田高校の生徒が不参加となったため、3校でのオンライン発表となったが、県内の大学生7名が伴走者として参加し、高校生のプロジェクトに適切な質問を投げかけるなど、大いに刺激を与えてもらった。参加した生徒の反応もよく、自校以外の取組に触れたり、大学生と学びを共有したりするなど貴重な経験となった。今回は県教委の担当者が各校への連絡・調整等を行ったが、こうした学校間の交流会が気軽に行えるよう、各校に置かれている探究学習推進担当者等に呼び掛けていきたい。



(3) 探究学習やキャリア教育におけるオンラインによる地域を越えた外部人材活用の可能性

新学習指導要領が目指す「社会に開かれた教育課程」の実現には、地域人材など学校外の人材の活用が欠かせないが、調整に手間がかかり教員の多忙化につながる恐れがある。また、外部の人材を活用しようにも、学校外のリソースとの接点が不足（人材の幅・専門性等）しているといった課題がある。そこで、島根県では学校外の教育資源を簡易に教員がオンライン上で調達できる手法の構築を目指し、試行を行った。

< 1 年次 >



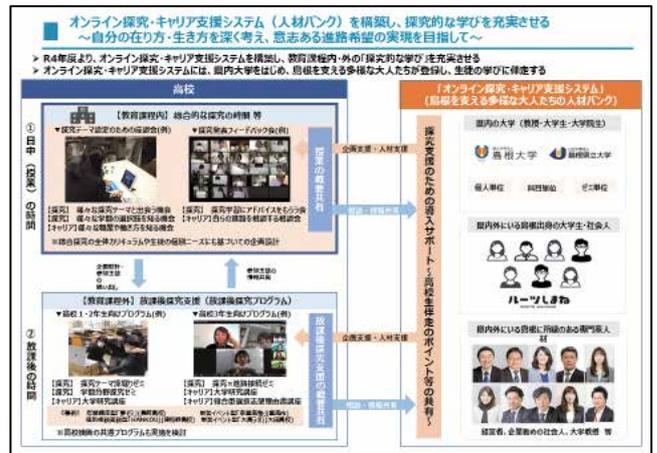
津和野高校 2 年生（文系コース・理数コース 29 名）を対象に、大学生との 1 対 1 の対話による進路学習を実施した。

授業実施までの課題や一人一台パソコンを使って個別最適な学びに対応できるかどうか、教室内の環境等を含めた課題の洗い出しを行った。

大学生を集めること（人数、理系・文系のバランス等）や事前研修、高校との打合せ等の負担は大きく、これをオンラインシステム上だけで行うことが可能かどうか、どうすれば負担の少ないシステムを構築できるか等、次年度への課題とした。

< 2 年次 >

2 年次は、高校でのキャリア教育や探究学習における外部人材の活用を支援する本システムを「しまねオンライン探究支援システム」と名付け、その構築に向けて 4 校での試行を行った。実際のシステムを使いながら、外部人材への依頼の流れや授業までのやりとり等を試行し、以下の 4 点について検証を行った。



- ① システムで「やれること」と「やれないこと」の明確化
- ② システムを活用していく上での流れや手続き、スケジュールの検証
- ③ 生徒の学びや成長に対する効果
- ④ 教員の負担軽減や学びに対する効果

4 校で行った試行検証は以下のとおりである。

- ・「伴走研修基礎編・応用編」動画の視聴を通じた教職員研修の実施（江津高校）
- ・研究領域が近い県内大学の先生方からの課題研究テーマに対するブラッシュアップ・フィードバック（益田高校）
- ・考えをまとめたり、自己表現したりするスキルの習得に向けた編集の専門家による講義（津和野高校）
- ・探究学習のテーマに近い専門性を持った専門家（教員・研究者、絵本作家、有機農家、ジビエ猟師・商品開発からの課題設定に対するブラッシュアップ・フィードバック（吉賀高校）



上記③④については以下のような検証結果を得ることができ、「しまねオンライン探究支援システム」が一定のニーズや教育効果があり、教員の負担軽減にも寄与することが確認できた。

- 地域にはいない人材との接点は、教員も生徒もニーズが高く、生徒の学びに大いに寄与する。専門家（実践者・研究者）、大学生など、どこに焦点を当てて人材登録を促進するか議論の余地がある。
- 人材を探す心理的・物理的負担が省け、前向きで協力的な人材バンクは有用である。
- 接点を持ったあとは、これまでの地域内の外部講師に相談してきたときと同様に調整負担がある。
- いつでもアクセスできる動画のコンテンツは活用しやすい。学習効果は対面に比べれば下がるが効果は十分にある。研修企画の調整や手間が省けることは実証された。

一方で、登録する人材の質的保証やセキュリティ対策等の運用面に係る課題やそれに伴うシステム開発及びランニングコスト等に係る経費増への解決策を見出すことができなかったため、3年次は県として実証を続けることを断念した。

< 3年次 >

「しまねオンライン探究支援システム」の構築について現段階では断念したが、外部人材の獲得と活用への課題感は各校にあると考えている。

そうした中で、今年度から社会教育課と定期ミーティングを開き連携を進めているが、社会教育課のHPに、講話や出前授業、インターンシップ、授業支援など、学校を支援するさまざまな分野の企業等を探すことができるサイトがあることを知った。分野別、地域別、校種別で検索ができ、支援内容や謝金の要否、対象地域、連絡先などが簡単に検索できるようになっており、校長会や教頭会で紹介したところである。他課や他部局との横連携・情報共有の重要性を認識した。



企業団体名	内容	幼	小	中	高	特
1 海上自衛隊 出前授業	講話					
2 海上自衛隊 出前授業	出前授業、インターンシップ					
3 島根県立 出前授業	講話等・体験					
4 島根県立 出前授業	出前授業、インターンシップ					
5 島根県立 出前授業	講話等・体験					
6 島根県立 出前授業	講話、体験学習・体験					
7 島根県立 出前授業	出前授業、体験学習					
8 島根県立 出前授業	講話、体験学習					
9 島根県立 出前授業	講話等・体験					
10 島根県立 出前授業	講話、体験学習					

島土町社会福祉協議会		
企業・団体名	学校に出かけての学習活動支援 (出前授業等)	体験活動・見学の受け入れ (職場見学・職場体験等)
内容	ふるさと福祉学習(出前授業・講話)	福祉体験(見学、体験、インターンシップ可)
分野	福祉・ボランティア	福祉・ボランティア
謝金・材料代等	不要	不要
交通費等	不要	
対象	幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校	幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校
活動範囲	企業・団体の所在地	県全域
備考	ホームページアドレス http://www.akom.sakura.na.jp/	
連絡先住所	〒694-0403 隠岐郡島土町3969-1	
電話	08514-2-0010	
FAX	08514-2-0600	
担当教名	事務局長 [REDACTED]	

3.5. 考察

(1) コンソーシアムの充実

2年次と3年次に行ったグランドデザイン PDCA 研修実施後のアンケート結果は以下のとおりである。今年度の研修では、「学校や地域等の課題に対し、チームとして協働し、取組を推進する力を高める」というねらいに対し、「十分達成」「ほぼ達成」と回答した受講者の割合が昨年度と比べて増えており、研修を通じてコンソーシアム内の協働性を高めるのに一定の役割を果たしたことがわかる。

< 2年次 >

	十分達成	ほぼ達成	やや未達成	未達成
重点的取組に対して、地域との協働体制における成果と課題を整理し、振り返りを行う	41%	59%	—	—
他の学校や地域等の取組の現状を理解し、次年度の自校の取組への見通しを持つ	17%	67%	16%	—
学校や地域等の課題に対し、チームとして協働し、取組を推進する力を高める	24%	52%	23%	1%

< 3年次 >

	十分達成	ほぼ達成	やや未達成	未達成
自コンソーシアムの重点的取組の当該年度評価を言語化し、次年度の取組の検討を行う	43.5%	53.2%	4.3%	—
学校や地域等の課題に対し、チームとして協働し、取組を推進する力を高める	28.9%	57.8%	13.3%	—

一方で、協働性に関して「やや未達成」と回答した受講者のほとんどが市部にあるコンソーシアムからの参加であった。10年以上前から地域との協働体制のもと教育活動を進めている離島・中山間地域と、コンソーシアムを構築して間もない、主に市部の学校・地域との間で、また地域との協働体制の推進を担う主幹教諭やコンソーシアム運営マネージャー、コーディネーターが配置されているかどうかで、コンソーシアムに対する意識や取組内容・協働のあり方に差があることについては、昨年度からの課題であった。今年度はそうした点も意識しながら、研修の設計や個別伴走、テーマ別ミーティングの実施、市町村への働きかけ等を行ってきたところではあるが、今後も継続して取り組むことで各コンソーシアムの推進を図っていきたい。

(2) オンラインを活用した学校間連携による探究学習の深化

2年次は2校で実施した探究学習発表会を、3年次は4校に広げて行った。そのぶん、参加した生徒たちはより多様な発表内容や活動の様子を知ることができ、また多様な意見に触れる機会となった。対面で実施した際には、発表や質疑応答の時間が終わった後にも、発表を聞いた生徒が発表した生徒のところに行き、さらに詳しく質問をしている姿を見ることができた。また、発表した3校の生徒同士が積極的に交流する場面も多く見られた。オンラインで実施した際には、県内大学の学生7名が伴走として参加することで、少し大人の視点からの助言を伝えられるとともに、大学生自身にとっても貴重な学びの場となった。このように、他校や大学生等との交流は、自身の探究学習の方法や過程を見直すきっかけになるとともに、様々な視点からの意見をもらうことでさらに学習を深めることができるため、今後も各校で意識的に関わり合う場を模索してもらいたい。

(3) 探究学習やキャリア教育におけるオンラインによる地域を越えた外部人材活用の可能性

「3.4. 取組内容」に記述したとおり、「しまねオンライン探究支援システム」は、生徒の学びの深化にとっても教職員の負担軽減にとっても一定の効果を見出すことができた一方で、すでに多くの外部人材とつながっている学校も多く、また、持続可能なシステムとしていくための課題への解決策が見出せず、実証を断念した。

その中で、県内の各高校に向けて、社会教育課HPにある「企業等と学校との連携」による人材獲得手段を紹介し、活用を促すことができたのは有効であった。一方で、大学生や所在する高校の地域では獲得できない学術的な専門性を持った人材、県外の人材等にはアクセスできず、学校が求める幅広いニーズには対応できないため、今後も地域を越えた外部人材活用への検討は続けていきたいと考えている。現在実施している県教委主催の「しまね探究フェスタ」には約 60 名のファシリテーターやサポーター（大学生や自治体職員、コーディネーター、企業関係者など）が立場や地域を超えて協力しているため、こうした場を通じて他地域が持つ人材を知り、必要に応じてコンソーシアム間で提供し合い、生徒の学びを深める動きが出てくるよう、フェスタの仕立て等も考えていきたい。

また、「人材バンク」と並行して構築を目指していた「ノウハウバンク」（教職員研修用動画、生徒の探究発表動画、教員の探究事例共有動画など）については、現在 Google Classroom を活用しているが、さらに別の方法がないかを検討していきたい。

4. まとめ

4.1. 遠隔授業

(遠隔授業を行う運営体制について)

本事業において遠隔授業をスムーズに進行できたのは各校の主幹教諭が積極的に授業者、サポート教員に寄り添い、必要に応じて県教委事務局に連絡や相談をするなどきめ細やかな調整を行ったからである。サポート教員も、各校の行事等による授業時間の変更、授業打ち合わせ、プリント用意、授業時のサポートなど積極的に行っていただいた。運営体制として仕組みを作ることはもちろんであるが、遠隔授業は対面授業より様々な手間がかかることから、関わる人が目的などをしっかりと共有することで、日々起こるトラブルにも対応することができたと考える。

(教育課程の共通化)

授業時間の共通化については JR 等の外的要因等から共通化は困難だと結論付けた。教育課程等についても各校のそれぞれのグランドデザイン・スクールミッション等の違いもあることから共通化は難しいと判断した。ただし、探究学習の進め方やテーマ設定、中間発表、最終発表等の発表の機会については、各校の調整により一部合同で行うことができた。

(遠隔授業に必要な ICT 環境について)

今年度、ネットワーク増強を行ったことから 1 人 1 台端末を用いて全員が Google Meet に入って授業を受講することが一部の教科で実施できた。個人個人の見取りが用意になり、質の高い授業の実現に一步近づいた。

(授業づくり・生徒の見取り・評価について)

本年度の授業は、演習を含む情報、地図等の細かな作業のある地理 A、対話の場面が多い倫理などそれぞれの授業に特徴があり、それぞれの授業の進め方、ICT 活用など、効果的な授業が

できる授業デザイン、見取りの手法、評価方法を検証できた。

(受信校で授業に立ち会う者の資質や役割について)

令和4年度の各サポート教員が得た知見を整理し、サポート教員の役割とトラブル対応などの対処方法をマニュアル化した。また、教室内のファシリテーションなど授業者と協力して授業を進めるなどサポート教員の積極的な関与により授業者も生徒も安心して授業に集中して取り組むことができた。

(遠隔授業を受けた生徒の評価や変容について)

昨年度受講生徒のアンケートから対面授業との差として意見を授業者に伝えにくい、質問がしにくいなどという意見があったがクラウド等を使用したが大きな改善には繋がらなかった。

4.2. コンソーシアム

本事業に採択されてから3年間、「コンソーシアム構築による教育の高度化・多様化に関する取組」について研究・実証を行ってきた。他道県の事業採択校とは異なり、CORE事業を行う4校では事業開始前からコンソーシアムが構築されており、各コンソーシアムで生徒の学びの高度化・多様化につながる協働体制や教育課程が検討・実施されていたため、何を目的にこの3年間の取組を行えばいいのか、悩みは大きかった。また、1年次が終わるときには県内すべての高校でコンソーシアムが構築されるタイミングでもあり、県全体での推進に向けた取組を行っていくことも必要であった。

そのような中で、改めて「コンソーシアム構築による教育の高度化・多様化」とは何かを考え、試行錯誤しながら取組を進めていくことができたことは大きな成果であった。うまくいかず途中で断念する取組もあったが、そうしたことを含めて挑戦する意義のある事業であったと考える。

また、この3年間で全国でのコンソーシアム構築が進み、地域と協働した様々な取組が生み出され、その事例等を聞かせていただいたことは、今後の本県のコンソーシアム推進の在り方を考えていくうえで、大いに参考となるものであった。

本事業は今年度で終了となるが、引き続き「5. 次年度に向けた計画概要 5.2. コンソーシアム」に記載した内容に取り組んでいきたいと考えている。

5. 次年度に向けた計画概要

5.1. 遠隔授業

○教育環境の変化に対応する遠隔授業のあり方

本事業において、単位認定を伴う遠隔授業にある一定の道筋ができた一方で、配信側、受信側双方の設備面、担当者の負担があることも把握することができた。

今回の事業では、小規模校の未開設科目の開講、専門教員が不足する教科・科目開設により生徒の進路の可能性を広げることが大きな目標だった。3年間という限られた事業であったが、今回の事業で開設できた配信授業を受講した生徒が難関大学に合格するなどの成果も出て、小規模校の可能性を広げることができることも分かった。

事業の検証結果から、今後については、学校間の配信ではなく拠点からの授業配信へ切り替えることを検討することとした。さらに、今回の事業で蓄積したノウハウを基に不登校生徒への対応などにも生かしていくことを検討したい。

5.2. コンソーシアム

○高校と地域双方に価値を生み出す持続可能なコンソーシアムの推進

学校や地域の関係者が年度ごとによって変わっていく中で、同じ理念のもとでコンソーシアムが続いていくよう、県教委が示すビジョンにも明記したうえで、伴走支援を行っていく必要がある。

○オンラインを活用した探究学習の深化

県教委に配置している4名の高大連携推進員が、県内高校生を対象に毎月企画している「オンライン高大連携プログラム」を活用し、定期的な探究学習会を実施していきたい。その中で、高校生の身近なロールモデルとなる大学生人材を活用し、生徒の学びを深化させていきたい。

○コーディネーター人材の配置・育成

全国各地で高校と地域との連携体制の構築が進んでいく中、コーディネーター人材の配置はますます難しくなっていくことが予想される。今後、島根大学と連携して実施している「社会教育士養成講座」の修了者等とのネットワークを構築し、市町村への情報提供ができる体制を検討していきたい。また、コーディネーター人材の配置が難しいコンソーシアムに対し、公民館等で働く社会教育士（主事）のコーディネーター機能等を活用できないか、模索していきたいと考えている。

6. 資料集

令和5年度実施 COREネットワークを構成する高等学校等に関する資料

管理機関名	島根県教育委員会
COREネットワークの名称	石見オロチCOREハイスクール
学校名・配信センター (所在市町村)	島根県立益田高等学校 (益田市七尾町 1-17)
設置者	島根県
課程	全日制課程
学科	理数科、普通科
生徒数(令和3年度)	390名
教員数(令和3年度)	48名(校長1, 教頭1, 主幹1, 教諭30, 講師6, 養護1, 実教2, ALT1, 非常勤5)
配信校・受信校の別	配信校 ・ 受信校

1. COREネットワークの構成校に選定した理由

<p>石見地区における中規模校であり、主に配信校としての役割を期待する。</p> <p>COREハイスクール構成校全体の課題として、県庁所在地である松江から遠方にあることや、益田市出身の教員が少なく、非常勤講師を探すのも困難な状況にある。その中で益田高等学校は、スーパーサイエンスハイスクールの指定校であることや、地域との協働による探究学習について成果を挙げていることから、島根県西部の拠点校としての役割は大きい。</p> <p>長年培ってきた益田高等高校での学習成果を他校との協働によって普及させるとともに、遠隔学習による質の向上が、島根県の遠隔授業モデルとなり、将来の島根を支える人材育成にも繋がっていくことを期待する。</p>
--

2. 遠隔授業に必要な機器(1校あたり)

機器等の種類	個数	整備状況		
		委託費により整備予定	設置者負担	
			整備予定	整備済
大型提示装置(プロジェクター・大型モニタ)	2	1(整備済)		1
WEBカメラ	1	1(整備済)		
マイクスピーカーシステム	1	1(整備済)		
PAシステム(拡張用)	1	1(整備済)		
制御用PC	1	1(整備済)		

3. 遠隔授業システムを常設する教室の数(令和3年度中に整備予定の教室を含む。)

遠隔授業システムを常設する教室数	1 教室
------------------	------

4. 令和5年度に遠隔授業で開設する科目数等(受信校のみ)

遠隔授業を実施する予定の合計科目数	— 科目
遠隔授業で実施する科目の合計単位数	— 単位

令和5年度実施 COREネットワークを構成する高等学校等に関する資料

管理機関名	島根県教育委員会
COREネットワークの名称	石見オロチCOREハイスクール
学校名・配信センター (所在市町村)	島根県立江津高等学校 (江津市都野津町 293)
設置者	島根県
課程	全日制課程
学科	普通科
生徒数(令和3年度)	183名
教員数(令和3年度)	33名(校長1,教頭1,主幹1,教諭18,講師4,養護1,実教1,ALT1,非常勤5)
配信校・受信校の別	配信校 ・ 受信校

1. COREネットワークの構成校に選定した理由

島根県西部の沿線部に位置するが、1学年2クラスの小規模校であり、市内唯一の県立普通科高校である。当該校では、探究学習を「KAWARAプロジェクト」と称し、瓦産業で栄えた歴史と文化の町に飛び出し、地域の人々と交流しながら課題発見問題解決型の学習を実践するなど地域と学校規模をいかした活動が特徴である。

本事業により、未開講科目の解消をはじめ、人的・地域的資源を活用した総合的な探究の時間の学習状況を他校と相互に公開し合うことで探究の質を高め、地域と協働するノウハウを展開していくことを期待する。

2. 遠隔授業に必要な機器(1校あたり)

機器等の種類	個数	整備状況		
		委託費により整備予定	設置者負担	
			整備予定	整備済
大型提示装置(プロジェクター・大型モニタ)	2	1(整備済)		1
WEBカメラ	1	1(整備済)		
マイクスピーカーシステム	1	1(整備済)		
PAシステム(拡張用)	1	1(整備済)		
制御用PC	1	1(整備済)		

3. 遠隔授業システムを常設する教室の数(令和3年度中に整備予定の教室を含む。)

遠隔授業システムを常設する教室数	1 教室
------------------	------

4. 令和5年度に遠隔授業で開設する科目数等(受信校のみ)

遠隔授業を実施する予定の合計科目数	3 科目
遠隔授業で実施する科目の合計単位数	6 単位

令和5年度実施 COREネットワークを構成する高等学校等に関する資料

管理機関名	島根県教育委員会
COREネットワークの名称	石見オロチCOREハイスクール
学校名・配信センター (所在市町村)	島根県立津和野高等学校 (鹿足郡津和野町後田ハ12・3)
設置者	島根県
課程	全日制課程
学科	普通科
生徒数(令和3年度)	208名
教員数(令和3年度)	27名(校長1,教頭1,主幹1,教諭16,講師4,養護1,実教1,ALT1,非常勤1)
配信校・受信校の別	配信校 ・ 受信校

1. COREネットワークの構成校に選定した理由

島根県西部の中山間地に位置する町内唯一の小規模校である。当該校は県のICTモデル事業校として1人1台端末での教育実践を行っており、本事業と連携した遠隔授業の効果検証を想定している。また、地域協働体制として財団法人を設立し、教育魅力化事業は一定の成果をあげていることから、県外からの入学生も多い。地域の関係機関と密接にかかわる中で、本事業で他のコンソーシアムと連携を図れることで、コンソーシアムの機能の強化と探究学習に更なる成果が期待できる。遠隔授業によって免許外教員の解消につながれば、多様な進路に応じた支援など、当該校の教育魅力化もさらに加速することが期待される。

2. 遠隔授業に必要な機器(1校あたり)

機器等の種類	個数	整備状況		
		委託費により整備予定	設置者負担	
			整備予定	整備済
大型提示装置(プロジェクター・大型モニタ)	2	1(整備済)		1
WEBカメラ	1	1(整備済)		
マイクスピーカーシステム	1	1(整備済)		
PAシステム(拡張用)	1	1(整備済)		
制御用PC	1	1(整備済)		

3. 遠隔授業システムを常設する教室の数(令和3年度中に整備予定の教室を含む。)

遠隔授業システムを常設する教室数	1 教室
------------------	------

4. 令和4年度に遠隔授業で開設する科目数等(受信校のみ)

遠隔授業を実施する予定の合計科目数	1 科目
遠隔授業で実施する科目の合計単位数	2 単位

令和5年度実施 COREネットワークを構成する高等学校等に関する資料

管理機関名	島根県教育委員会
COREネットワークの名称	石見オロチCOREハイスクール
学校名・配信センター (所在市町村)	島根県立吉賀高等学校 (鹿足郡吉賀町七日市 937)
設置者	島根県
課程	全日制課程
学科	普通科
生徒数(令和3年度)	103名
教員数(令和3年度)	26名(校長1,教頭1,主幹1,教諭9,講師3,養護1,非常勤10)
配信校・受信校の別	配信校 ・ 受信校

1. COREネットワークの構成校に選定した理由

島根県西部の中山間地に位置する町内唯一の小規模校である。町内3中学校との中高一貫教育(連携型)を導入し、また県内で最初にコンソーシアムを設立した。そのため吉賀町との協力体制が確立されており、生徒募集や地域課題解決型学習の推進、大学生交流事業等の情報共有を図っている。アントレプレナーシップ教育と称した地域課題解決型学習の推進においては、町役場各課が生徒のフィールドワーク先として地元民間企業等をリードする役割を積極的に担い、地域住民へ向けた成果発表会を年度末に実施している。遠隔授業によって、教員数が少ないことによる未開講科目の解消に加え、地域関係機関と密接に連携した取組の成果普及を期待する。

2. 遠隔授業に必要な機器(1校あたり)

機器等の種類	個数	整備状況		
		委託費により整備予定	設置者負担	
			整備予定	整備済
大型提示装置(プロジェクター・大型モニタ)	2	1(整備済)		1
WEBカメラ	1	1(整備済)		
マイクスピーカーシステム	1	1(整備済)		
PAシステム(拡張用)	1	1(整備済)		
制御用PC	1	1(整備済)		

3. 遠隔授業システムを常設する教室の数(令和3年度中に整備予定の教室を含む。)

遠隔授業システムを常設する教室数	1 教室
------------------	------

4. 令和5年度に遠隔授業で開設する科目数等(受信校のみ)

遠隔授業を実施する予定の合計科目数	1 科目
遠隔授業で実施する科目の合計単位数	2 単位

令和5年度実施計画書（抜粋）

遠隔授業を行う教科・科目に関する資料

遠隔授業を行う教科・科目に関する資料（令和5年度分）

受信校名	吉賀高等学校		課程	全日制
			学科	普通科
教科	地理歴史科	開設学年		第3学年
科目	地理A	遠隔授業開始年度		令和5年度
配信校名	益田高等学校			配信教室の生徒の有無 無
同時に受信する学校（学年）	(年)		(年)	
	(年)		(年)	
遠隔授業で実施する主な理由		多様な教科・科目の開設		
		習熟度別指導の実施		
		免許外教科担任制度の解消		
	○	その他（理由を記入） 日本史を専門とする教員が地理を指導するような状況の解消		
単位数	2単位	必修・選択の別		必修
遠隔授業により期待される効果	吉賀高校では、令和3年度から地理の専門の教員が配置されなくなった。現2年生は全員地理Bを選択していることから、令和4年度は「地理A」を遠隔授業で行うことで、専門科目外で担当している教科の専門性向上を図る。			
受信教室	○	遠隔授業システムが常設されている教室		
		遠隔授業を実施する時間のみ機器を搬入する教室		
授業回数	70	年間の授業回数（授業1回当たり50分換算とする。以下同じ。）		
	62	遠隔による授業回数		
	8	対面による授業回数（年間授業回数－遠隔による授業回数）		
受信教室に配置される者	教員		教員以外の職員	
	○		職名：	
教員以外の職員の配置により期待される効果				

遠隔授業を行う教科・科目に関する資料（令和5年度分）

受信校名	津和野高等学校		課程	全日制
			学科	普通科
教科	公民科	開設学年		第3学年
科目	倫理	遠隔授業開始年度		令和5年度
配信校名	益田高等学校			配信教室の生徒の有無
同時に受信する学校（学年）			(年)	(年)
			(年)	(年)
遠隔授業で実施する主な理由	<input type="radio"/>	多様な教科・科目の開設		
	<input type="radio"/>	習熟度別指導の実施		
	<input type="radio"/>	免許外教科担任制度の解消		
	<input type="radio"/>	その他（理由を記入）		
単位数	2単位	必修・選択の別		文系選択
遠隔授業により期待される効果	津和野高等学校の「倫理」は専門科目以外の教員が担当している。配信校からの遠隔授業を令和4年度に履修した2年生について、3年次の選択科目にして連続性を持たせることで、生徒の進路保障につながる上でも有効な科目選択になると考える。			
受信教室	<input type="radio"/>	遠隔授業システムが常設されている教室		
	<input type="radio"/>	遠隔授業を実施する時間のみ機器を搬入する教室		
授業回数	70	年間の授業回数（授業1回当たり50分換算とする。以下同じ。）		
	62	遠隔による授業回数		
	8	対面による授業回数（年間授業回数－遠隔による授業回数）		
受信教室に配置される者	教員		教員以外の職員	
	<input type="radio"/>		職名：	
教員以外の職員の配置により期待される効果				

遠隔授業を行う教科・科目に関する資料（令和5年度分）

受信校名	江津高等学校		課程	全日制	
			学科	普通科	
教科	公民科	開設学年		第3学年	
科目	倫理	遠隔授業開始年度		令和4年度	
配信校名	益田高等学校			配信教室の生徒の有無	無
				同時に受信する学校（学年）	
遠隔授業で実施する主な理由	<input type="radio"/>	多様な教科・科目の開設			
	<input type="radio"/>	習熟度別指導の実施			
	<input type="radio"/>	免許外教科担任制度の解消			
	<input type="radio"/>	その他（理由を記入）			
単位数	2単位	必修・選択の別		選択	
遠隔授業により期待される効果	江津高校では、公民科の免許を持つ教員がいないため、公民の専門科目が未開講である。配信校から「倫理」を遠隔授業で行うことで、生徒の多様な選択教科、科目を開講でき、進路保障につながると考える。				
受信教室	<input type="radio"/>	遠隔授業システムが常設されている教室			
	<input type="radio"/>	遠隔授業を実施する時間のみ機器を搬入する教室			
授業回数	70	年間の授業回数（授業1回当たり50分換算とする。以下同じ。）			
	62	遠隔による授業回数			
	8	対面による授業回数（年間授業回数－遠隔による授業回数）			
受信教室に配置される者	教員		教員以外の職員		
	<input type="radio"/>		職名：		
教員以外の職員の配置により期待される効果					

遠隔授業を行う教科・科目に関する資料（令和5年度分）

受信校名	江津高等学校		課程	全日制
			学科	普通科
教科	情報科	開設学年		第2学年
科目	情報Ⅰ	遠隔授業開始年度		令和5年度
配信校名	益田高等学校			配信教室の生徒の有無 無
同時に受信する学校（学年）	(年)		(年)	
	(年)		(年)	
遠隔授業で実施する主な理由		多様な教科・科目の開設		
		習熟度別指導の実施		
	<input type="radio"/>	免許外教科担任制度の解消		
	<input type="radio"/>	その他（理由を記入） 臨時免許等で担当している教科の専門性の高い指導の実施		
単位数	2×2クラス	必修・選択の別		必修
遠隔授業により期待される効果	受信校の江津高等学校の「情報」は専門科目以外の教員が担当している。益田高等学校から専門科目とする教員が遠隔授業をすることにより、受信校の授業の質が向上すると考えられる。			
受信教室	<input type="radio"/>	遠隔授業システムが常設されている教室		
		遠隔授業を実施する時間のみ機器を搬入する教室		
授業回数	70	年間の授業回数（授業1回当たり50分換算とする。以下同じ。）		
	62	遠隔による授業回数		
	8	対面による授業回数（年間授業回数－遠隔による授業回数）		
受信教室に配置される者	教員		教員以外の職員	
	<input type="radio"/>		職名：	
教員以外の職員の配置により期待される効果				

令和5年度取組成果発表報告会資料

(開催日：令和6年1月30日 会場：アットビジネスセンター東京駅八重洲通り)

島根県 取組成果発表報告



事業の背景と課題

1. 人口が県東部に偏在し、西部(石見地区)は減少
2. 学校内資源の活用や視点の硬直化
3. 西部にある高校は全て中小規模校
4. 西部出身の教員が少なく、安定しにくい学校経営
5. 高校魅力化コンソーシアム同士の連携



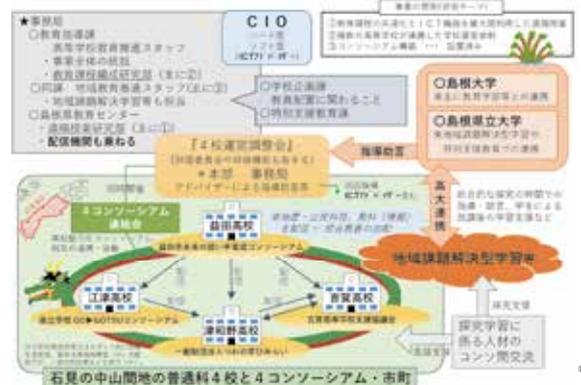
実現したい価値



1. ICT機器を利用した遠隔授業の充実
2. コンソーシアムの充実
3. オンラインを活用した学校間連携による探究学習の深化
4. 探究学習やキャリア教育におけるオンラインによる地域を越えた外部人材活用の可能性

「しまね教育魅力化ビジョン」
～ふるさと島根を学びの原点に未来にははたたく心豊かな人づくり～

島根県の体制



遠隔授業に関する取組

本事業を通して明らかにしたい事項(調査研究テーマ)

(1)ICT機器を利用した遠隔授業の実現



(1) ICT機器を利用した遠隔授業の充実

1年次(R3年度)

- ・遠隔授業の手法の模索
 <試行配信> 島根県教育センター → 受信予定校
 学校配信拠点校 → 受信予定校
 英語・情報Ⅰ・数学Ⅰ・世界史



- ・授業配信教員を対象とした研修
 3月・・・遠隔授業の手法、クラウドを活用した授業、評価について研修

2年次(R4年度)

- ・受信校サポート教員を対象とした研修
 4月・・・受信機器設定、授業サポートの役割について研修



- ・遠隔授業本格配信
 倫理・地理B・情報Ⅰの授業配信実施

3年次(R5年度)

- ・受信校サポート教員を対象とした研修

- ・遠隔授業本格配信
 倫理・地理A・情報Ⅰの授業配信実施



- ・遠隔授業公開授業
 倫理・地理A・情報Ⅰの公開授業実施

- ・遠隔による検定補習授業
 情報処理検定試験の補習配信

配信授業



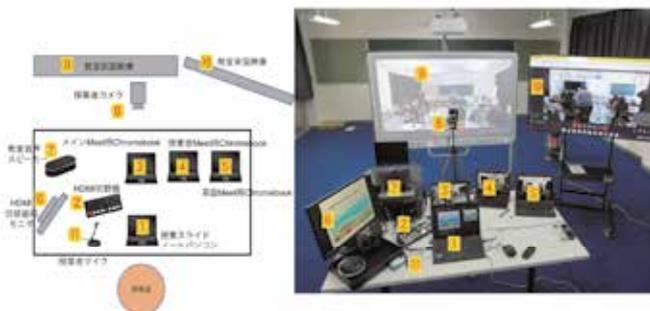
7

配信授業



8

配信授業（配信側・環境・技術）



9

配信授業（受信側・環境・技術）



10

評価と見取り

- 遠隔授業で行った学習活動(益田高校→津和野高校 2年生 倫理 2単位)
Google Classroom、Google Spreadsheets、Google Jamboardを利用したジグソー活動
- Google Classroom(課題配信:エキスパート活動)

○ Google Spreadsheets(共同編集:エキスパート活動)



○ Google Jamboard(共同編集:ジグソー活動)



※著作権保護のため画像を一部加工しています。

11

総括(遠隔授業)

調査研究テーマ(総括)

(1) ICT機器を利用した遠隔授業の充実

→ 遠隔による授業実施の可能性

- ・対面授業より授業準備に時間がかかる(授業設計の意識改革が必須)
- ・サポート教員は生徒との関係性があれば教員以外でも対応可能
- ・クラウドの有効活用により、見取りを補完・充実させることができる
- ・対面授業は多いほうが、生徒との人間関係の形成につながる

副産物としての気づき

→ クラウド環境を用いた学習(自習)の広がり・可能性

- ① Google Classroomで課題配布
 - ・教科書、ネット活用、生徒間の対話をおとして課題に取り組む
- ② ①の作業が終わる頃に次の課題を配布(タイマー設定)

※ クラウド環境での学習環境に慣れている生徒であり、なおかつクラス内で対話的な授業風土があれば能動的に自習が機能する

12

コンソーシアム構築による教育の高度化・多様化に関する取組

本事業を通して明らかにしたい事項(調査研究テーマ)

- (1) コンソーシアムの充実
- (2) オンラインを活用した学校間連携による探究学習の深化
- (3) 探究学習やキャリア教育におけるオンラインによる地域を越えた外部人材活用の可能性

2・3年次(R4・5年度)

全ての県立高校のコンソーシアムに対し、その取組・活動を推進していくフェーズ

全ての高校・地域に対して地域との協働に係る研修や訪問等を実施

CORE4校の「コンソーシアム構築による教育の高度化・多様化に関する取組」を推進



(1) コンソーシアムの充実

すべての県立高校に地域との協働体制である「高校魅力化コンソーシアム」を構築 (R3年度末)

(益田高校:R元.12 江津高校:R2.6 津和野高校:R2.3 吉賀高校:H31.1 設置)

1年次(R3年度)

- ・学校外の教育資源を活用した探究的な学び(コンソーシアムを活用した教育活動)の実態把握

＜益田高校＞	・益田坂カトリック…高校生が地域の若手人材との対話を通して、自分の将来や地域の魅力などについて考える進路探究学習
＜津和野高校＞	・プリコラージュゼミ(1年生)、マイプロジェクト活動(2年生)を支援 ・トークフォーラムの企画と参加 ・探究学習等に関わる人材のマッチングサイト開設
＜江津高校＞	・県立大学…バーチャル国際交流会(通年)参加、ラオス絵本プロジェクト ・江津市都野津町…街プロジェクト、古民家プロジェクト、小学生学習支援
＜吉賀高校＞	・アントレプレナーシップ教育における都市部大学生の伴走 ・目線合わせ講演会(教員、地域伴走者対象)の実施

- ・探究活動成果発表会(各校実施)への参加
- ・「しまね大交流会」や「しまね探究フェスタ」(県教委実施)など、生徒の発表や学び合いの場を提供

すでに各校で独自の連携や取組が進み、また私立高校や特別支援学校を含めた複数校でコンソーシアムを構築している学校があり、4校での連携は難しい。

地域との協働体制構築の流れ

「県立高校魅力化ビジョン」の策定

年度	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
取組名	「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」			「教育魅力化推進事業」			「教育魅力化推進事業」					
支援対象地域	離島・中山間地域(町村)			離島・中山間地域(市部)(松江、出雲を除く)			全県(すべての市町村)					
支援対象校数	5校			8校			20校(離島・中山間地域のすべての県立高校)			36校(すべての県立高校)		
設置状況	対象の地域・高校において、コンソーシアムの前身となる「高校魅力化推進協議会」(高校と市町村との「協働運営」を志向した協議の場)を設置 <平成30年5月時点 13協議会(16市町村2校)で設置>						R3年度末までにすべての県立高校でコンソーシアムを構築			学校運営協議会導入		コンソーシアム、学校運営協議会評価

(2) オンラインを活用した学校間連携による探究学習の深化

2年次(R4年度)

探究学習2校合同実施
(吉賀高校⇄津和野高校)



放課後各校2チームがそれぞれの探究学習の取組を発表し、意見交換を実施。

3年次(R5年度)

探究学習4校合同実施



7月(対面)、11月(オンライン)で探究学習の取組を発表し、意見交換を実施。11月は県内の大学生も伴走者として参加。

(3) 探究学習やキャリア教育におけるオンラインによる地域を越えた外部人材活用の可能性

1 本事業の背景

学習指導要領が目指す「社会に開かれた教育課程」の実現には、地域人材など学校外の人材の活用が欠かせないが、調整等に手間がかかり教員の多忙化にもつながる恐れがある。また、外部の人材を活用しようにも、学校外のリソースとの接点が不足(人材の幅・専門性等)しているといった課題がある。そこで、学校外の教育資源を簡易に教員がオンライン上で調達できる手法の構築を目指している。

2 目指す効果

- ① 探究学習、進路指導等における授業の質の向上(県内外の多様な人材からのインプット・アウトプット機会の拡大、良質教材の確保、指導力向上)
- ② 大学入試(主に「総合型・推薦型選抜」)への着実な対応
- ③ 生徒一人ひとりの意思に基づく、多様な進路の実現
- ④ 教員の働き方改革の推進



1年次(R3年度)



津和野高校2年生(文系コース・理数コース29名)と大学生29名とが、1対1で進路に関する対話を実施
 目的: 進路選択を前に自らの進路イメージを広げ、自らの興味関心・学びたいことを振り返り、進路選びにおいて大事にしたい要素を言葉にする

2年次(R4年度)

- ①システムで「やれること」と「やれないこと」の明確化
- ②システムを活用していく上での流れや手続き、スケジュールの検証
- ③生徒の学びや成長に対する効果
- ④教員の負担軽減や学びに対する効果

- <江津高校>
 ・「伴走研修基礎編・応用編」動画の視聴を通じた教職員研修の実施
- <益田高校>
 ・研究領域に近い県内大学の先生方からの課題研究テーマに対するブラッシュアップ・フィードバック
- <津和野高校>
 ・考えをまとめたり、自己表現したりするスキルの習得に向けた編集の専門家による講義
- <吉賀高校>
 ・探究学習のテーマに近い専門性を持った専門家(教員・研究者、絵本作家、有機農家、ジビエ猟師・商品開発)からの課題設定に対するブラッシュアップ・フィードバック

19



項目	内容	備考
目的	県内各高校で実施されている探究学習の現状を把握し、他校との連携による探究学習の深化を図る。	県内各高校の探究学習の現状を把握し、他校との連携による探究学習の深化を図る。
対象	県内各高校の探究学習の現状を把握し、他校との連携による探究学習の深化を図る。	県内各高校の探究学習の現状を把握し、他校との連携による探究学習の深化を図る。
実施時期	令和4年度	令和4年度
実施場所	県内各高校	県内各高校
実施者	県教育委員会、県立高校、県立大学	県教育委員会、県立高校、県立大学
実施内容	県内各高校の探究学習の現状を把握し、他校との連携による探究学習の深化を図る。	県内各高校の探究学習の現状を把握し、他校との連携による探究学習の深化を図る。

21

<③④についての検証結果>

- 地域にはいない人材との接点は、教員も生徒もニーズが高く、生徒の学びに大いに寄与する。専門家(実践者・研究者)、大学生など、どこに焦点を当てて人材登録を促進するか議論の余地がある。
- 人材を探す心理的・物理的負担が省け、前向きで協力的な人材バンクは有用である。
- 接点を持ったあとは、これまでの地域内の外部講師に相談してきたときと同様に調整負担がある。
- いつでもアクセスできる動画のコンテンツは活用しやすい。学習効果は対面に比べれば下がるが効果は十分にある。研修企画の調整や手間が省けることは実証された。

「しまねオンライン探究支援システム」が一定のニーズや教育効果があり、教員の負担軽減にも寄与することが確認できた一方で、登録する人材の質的保証やセキュリティ対策等の運用面に係る課題やそれに伴うシステム開発及びランニングコスト等に係る経費増への解決策を見出すことができなかったため、県として実証を続けることを断念。

3年次(R5年度)は実証を行わない

社会教育課HP「企業等と学校との連携」の紹介

講話や出前授業、インターンシップ、授業支援など、学校を支援するさまざまな分野の企業等を探ることができるサイト



総括(コンソーシアム)

調査研究テーマ(総括)

- (1) コンソーシアムの充実
 - コンソーシアムの理念を学校と地域が共有し、互いの課題に対し、主体的に解決しようとする、対話の風土ができてきた。
 - 他コンソーシアムの事例を共有することで、協働体制や探究学習の深化・充実につながっている。
- (2) オンラインを活用した学校間連携による探究学習の深化
 - 参加生徒や教職員の満足度は高い。授業時間内での発表・意見交換は、授業進度の違いや授業時間の調整に苦心する。
- (3) 探究学習やキャリア教育におけるオンラインによる地域を越えた外部人材活用の可能性
 - 県内(自他地域含め)の人材活用には、社会教育課HPは有効。横連携の必要。一方で、大学生や学術的な専門性を持った人材、県外の人材等にはアクセスできないため、学校が求める幅広いニーズには対応できない。

22

今後の展望

遠隔授業

- ・遠隔授業配信センターの拠点整備
- ・遠隔による補習・検定指導・不登校対応に向けた研究
- ・しまね教育魅力化ビジョン(2期)での遠隔教育の位置づけ・計画策定

コンソーシアム

- ・高校と地域双方に価値を生み出す持続可能なコンソーシアムの推進
- ・オンラインを活用した探究学習の深化
 - 高大連携プロジェクトを活用した定期的な探究学習会の実施／大学生人材の活用
- ・コーディネート人材の配置・育成
 - 公民館(社会教育主事等)と連携したコーディネート機能の活用

23

地域社会に根ざした高等学校の学校間連携・協働ネットワーク構築事業
(COREハイスクール・ネットワーク構想)
令和5年度 成果報告書(3年次)

令和6年3月発行

発行者 島根県教育庁教育指導課
住所 〒690-8502 島根県松江市殿町1番地
電話 0852-22-6863 F A X 0852-22-6026

